第１節　相川の都市形成と変遷

１．上相川の形成と近世相川

(1) 鉱山町の諸段階

鉱山町・上相川の初期の特質は、石見銀山（島根県）と院内銀山（秋田県）を比較することによって明らかになる。

石見銀山は15世紀前半の天文期に開かれた銀山であるが、当初の鉱山町は現在の大森にはなく、銀が採掘される山々に展開していた。毛利時代の銀山の具体的様相は必ずしも明らかではないが、銀山は六谷（下河原・休・昆布山谷・栃畑谷・大谷・石銀清水谷）に分れており、慶長５年（1600）「石見国銀山諸役銀請納書」（「吉岡家文書」）によると、谷ごとに地子銭が納められていた[1]。これからみて、おそらく各谷の鉱脈近くに山師以下、金名子・大工等の採掘労働者、床屋・鍛冶等の製練技術者が一定の集落を形成していたと考えられる。その後石見銀山は、大久保長安が代官として入山し、江戸幕府直轄領となり、山麓の大森に陣屋を中心とした町が成立する。それ以前は銀山・採掘労働者・製練技術者は地理的に分離せず一定の領域に集中しており、鉱山町の原初的形態をみることができる。

秋田藩院内銀山は、上相川よりも遅れて慶長12年に開発された。院内は秋田藩直轄の直山で、銀山奉行の支配下に置かれており、銀山町は山（山小屋）と町（下町）の２つの地区に分れていた[2]。山小屋は、山師・金名子など採掘に従事する業者や親方職人と、彼らに雇用さ

図５―１　上相川遺跡図

れている掘大工や掘子等の居住区で、「惣山師」が支配層を構成していた。一方の下町は、買石・床屋・鍛冶などの製練･冶金業者や職人の居住区であった。すなわち、ここでは銀山―山小屋（採掘業者居住区）―下町（製練業者居住区）という銀の採掘から製練にいたる一連の作業に明確に対応した居住域の分離（ゾーニング）が施されていたことになる。

この中間に位置する上相川はどうか。上相川に先立ち天文 11 年（1542）にはその南東に位置する鶴子において銀山が発見されたと伝えられ、その後、鶴子の奥山にあたる相川で鉱脈が発見される。相川金銀山は院内銀山に先立つ慶長６年（1601）に開山されており、金銀山が発見されると各地から山師集団が続々と入山し、初期の鉱山町が上相川に形成される。これらの町々は金銀山の下、北沢の川筋に立地し、あらかじめ鉱石の製練に適した位置が選ばれていることが注目される。当初の町の形態は不明な点が多く、慶長 17 年から院内の銀山奉行を務めた梅津政景（うめづまさかげ）によると「佐州なとにてハ、すは町・弥十郎町・ゆふはく町なとゝ申候ハ、其身の金子を壹町ノ内ニ差置候」（『梅津政景日記』）とあるように[3]、山師によって組織された技術者集団がひとつの町を形成し、かつ鍛冶町・床屋町などの町名から推察されるように、買石業者・製練技術者もまた上相川に住んでいた。すなわち、採掘と製練をおこなう業者・職人が居住区を分けずに集住し、山師を頂点とするヒエラルキッシュな組織集団が個別の町空間と対応する状況をみることができる。

以上の石見→相川→院内という推移は、金銀山に直結する一元的な鉱山集落から、鉱山と集落が分離する二元的な都市へ、そして採掘業者の集落＝山小屋と製練業者の住む下町に居住区を分ける三元的な鉱山都市への変化とみることができる。その後､相川は幕府直轄領となり、慶長８年大久保長安が佐渡奉行所を山下の台地の突端に構え､奉行所と上相川を結ぶ台地の尾根上には京町以下、金銀の流通に関わる商人資本や消費物資をサービスする商人・職人の居住区が形成される。さらに相川湾沿いにも末端の労働者や中小商人・職人の町が創出され、近世都市の相貌を獲得するにいたる。

なお、近年上相川についてはその一部ではあるが、初期鉱山町と目される部分が発掘された。その結果、比較的強い傾斜をもつ斜面地の等高線に直交するかたちで細い道路が２本走り、斜面地最上部にかつての大山祇神社の境内がある。この２本の主要道路に沿ってさまざまな規模のテラス状敷地が検出されており、宝暦２年（1752）の「上相川絵図」、安政期「屋敷帳」などの絵図、明治期の地籍図があり、発掘成果との対比作業が可能である。上相川はすでに間歩と集落とは一定の距離を隔てており、番所が置かれていたことから、一定の管理下におかれた鉱山町であったことが推察され、発掘されたテラス状の敷地は不規則な形態を示しているものの、一定の計画性の下に形成された集落とみることができる（図５―１）。

一方、上相川に先立って開発された鶴子では、近年「荒町遺跡」と代官屋敷跡の発掘調査がおこなわれた。代官屋敷跡では比較的大規模な整然とした矩形の建築の存在を示唆する溝・柱穴などの遺構が検出されたが、荒町遺跡ではかなりの急傾斜の斜面上に上相川よりさらに不規則なテラス状敷地が無数に発見されている。上相川では斜面等高線に直交する道路が比較的明瞭に目視できるが、鶴子では細い曲折した道路が１本あるのみで、敷地と敷地をつなぐアクセスはむしろ等高線ラインに沿って横につながっていたのではないかと推測されるのである。敷地は等高線に規定され、より原始的形状を示しており、鶴子から上相川へというわずか数年の間に鉱山町の近世化は思いの外急速に進んだことが確認できる（図５―２）。

上相川のような鉱山町では地下資源に吸着して、すなわち大地の「資源性」に大きく依拠して都市形成がおこなわれており、この点で同時代の温泉町（伊香保など）と近似的である。両者は斜面上の土地を人工的に造成したテラス状の宅地形成を経て町場化したという点でもよく似通っている。この急斜面のテラス状の宅地開発は、城下町のひとつのメルクマールとされる織田信長の安土城下町の大手筋とその両側に並ぶ武家屋敷群の構成とも共通する[4]。また山岳地に営まれた紀州根来寺などの宗教都市は早くから石垣などによって階段状の土地造成がおこなわれたのであって、テラス状の空間構成は近世固有のものではなく明らかに中世に遡るものであるが、中心となる道に沿って両側に敷地が並ぶ姿は近世的な景観への変化を物語るものということができる。

(2) ディベロッパーとしての山師

上相川には山師の名を冠した町名があり、これらは山師集団によって開発された町と考えられている[5]。たとえば『佐渡相川志』には惣徳町について、

> 此所先年山師田中小左衛門後ニ惣徳ト云フ人ノ開発ナリ。因テ名トス。惣徳男子新十郎、妹ヲおはなト言フ。慶長年中大久保石見守ニ仕フ。父惣徳ニ銀山ヲ下サレ是ヲおはな間歩ト言フ

とあり、この伝承が事実であることは慶長 10 ～ 15 年の「佐州銀山御直山鍛冶炭渡帳」（川上家文書）に山主「田中宗徳」が下松の「宗徳間歩」で炭 15 俵を受け取って

いることから明らかである。同帳には播磨九郎左衛門、江戸外記、信濃小右衛門などの山師名が確認され、上相川の九郎左衛門町、小右衛門町、外記町にそれぞれ対応するものと思われる。また『佐渡年代記』の慶長９年（1604）条には、

> 相川銀山はじまりてより他国者おびただしく来り住居す、町々の名、多くは住居の者の名を取りて唱ふ、庄右衛門町は山仕大坂庄右衛門住し、宗徳町は田中宗徳が家あり、諏訪町は信州諏訪の者来りて住し、（中略）新五郎町は山仕豊部新五郎家あり（中略）夕白町は備前夕白住居、弥十郎町は丹羽弥十郎、主兵衛坂は若狭主兵衛住し云々

とあり、ここには上相川以外の町も含まれるが、山師集団の拠点居住区であったことは疑いない。

具体的な居住者の実態については同時代史料がなく、後の史料より推測するほかないが、寛永 20 年（1643）「六、七両月、相川上下組小役銀高」（『佐渡国略記』）の上組分をみると、「ねこ」（ねこ流し、砂泥化した鉱石を水洗いする施設）90 筋、「磨（うす）」44 柄、「ゆり板」（鉱石沈殿物をゆり分ける板）104 枚、「大圧屋」５軒、吹分床６軒、柄実買７人、歩替屋 17 人、鍛冶屋３軒が書き上げられ、製錬業者・職人が日々生産を行う場としての性格を窺うことができる。一方、ここには登場しない採掘に携わる技術者・職人・労働者は当然上相川に居住していたはずである。かれらは山師とどのような関係を結んでいたのか。ふたたび、『梅津政景日記』をみることにしよう。

慶長 19 年７月、院内銀山では七十枚間歩分について山屋敷の競りがくじ引きでおこなわれた。その際、山師達は銀山奉行の政景に対して前掲の佐渡相川の例を持ち出し、配下の金名子と一所に居住したいと申し入れた。しかし、この申入れに対して、政景は、

> 山を我手柄ニテ見立、手前之才覚にてかなごを集、野山を切明、我身の居度所ニ、奉行法度もなきい前、有付候ハヽ、左も可有候、此山之儀ハ、窪田御奉行衆為御代官、兵庫殿御出被成、屋敷を被渡割被下候上ハ、其身共ほしいまゝニハ、成間敷候

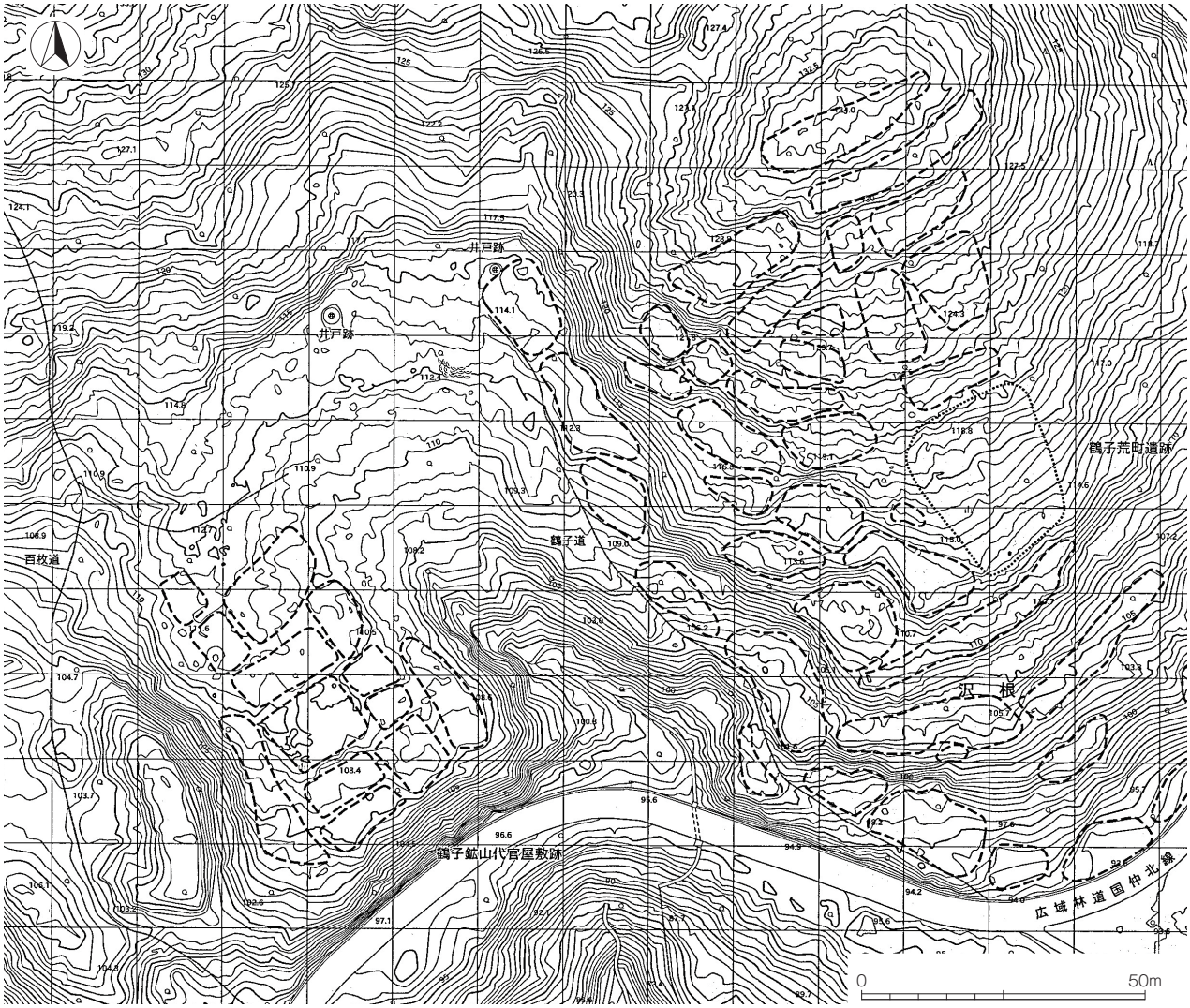


図５―２　鶴子代官屋敷跡・荒町遺跡図

と述べ、山師の手柄によって開発された鉱山で、みずからの才覚で組織した金名子であればいざしらず、藩主導のもとに開発された銀山に後から参入してきて、なおかつ金名子も充分に組織しえない山師に対してこのような申入れを承認することはできないと明言し、願上を却下している。その後銀山奉行は別の場所に町割を施し、金名子達の居住区を割り出している。ここには山師から一定の自立を果たした金名子の姿をみることができる。

一方、相川では「其身の金子を壹町ノ内ニ差置」ことが可能であった。山師が組織する技術者･労働者集団は、親方である山師の配下にあり、彼らは単なる労働力としてのみならず、おそらく人格的支配をも受けるような存在であったと想定される。すなわち、初期の上相川の町は、山師という卓越したボスを頂点とするヒエラルキッシュな社会集団の駐屯・生産地点としての性格が濃厚であり、その集団の構造が町の空間にも投影されていたとみるべきである。後の史料になるが、「元禄七年佐渡国雑太郡相川町中畑屋敷御検地水帳」によると、上相川の各町を構成する屋敷は、きわめて小規模なものから、大規模なものまで存在し、慶長以降寛永期にかけて新たに成立したフラットな町とは明らかに構成原理を異にする（次節参照）。これは、上で述べた初期の山師町の特異な性格を伝えているからに他ならない。

ところで上相川の山師の町は、初期城下町の町と共通する部分が認められる。たとえば、成立期の江戸では、徳川氏の伝馬・染物・鉄砲・大工等の御用を国役で請負う代償として数町単位で町地を拝領した国役請負者が町割を施し、配下の者に屋敷地を分配して住まわせたと推定されている(6)。この国役請負者が初期の町の支配者であり､寛永期の江戸を描いたとされる｢江戸図屏風｣｢江戸名所図屏風｣に登場する表通り角地の豪壮な城郭風町家は、彼らの権威を誇示するために建てられたと考えられる(7)。こうした国役請負者は初期特権商人であると同時に、町割をみずからおこなえるような土木技術を持ち、数多くの技術者・職人集団を組織してその頂点に立つような存在であった。相川における山師は鉱山開発の専門集団であったという違いはあれ、近世初頭の城下町建設に携わった国役請負者と山師は様々な職人・商人を抱え込むヒエラルキッシュな社会集団（組）を構成するという点で類似の性格が見出せるのである。彼らは戦国の混乱期、各地で戦国大名の物資・武器の調達・生産、築城・鉱山開発などに従事しながら、自律的に形成された組織とみてよく､慶長期の相川の山師の出身地が江戸、大坂、京都、加賀、近江、伊勢、越前、越中、信濃、石見、但馬など広範な分布を示す(8)ことは、金銀山発見のニュースをいち早くキャッチする情報網と、ただちに入山可能な技術者集団が全国各地に成立していたことを物語るものである。

山師の町と鉱山の間歩がいかなる関係にあったかについては今のところ明らかにしえない。しかし、間歩の開発順序は上相川の町の形成過程とおそらく連動していたはずであるし、良質な間歩を稼いだ山師の町は発展を遂げることになる。従来必ずしも注目されなかった、間歩と町との相関関係を探ることは今後の重要な課題となろう。

(3) 相川の近世都市化と上相川

慶長８年（1603）大久保長安による相川支配は、初期の間歩と上相川からなる二元構造を解体させ、鉱石の採掘から製練、出荷までの作業工程をシステマティックにおこなう近世産業都市へと変貌させることになる。それは、北沢の川筋を軸として山上から下町へ展開する、山―台地―浜―海という地形構造を巧みに利用した近世都市への改変であった。物流の各ポイントには番所が配され、相川という都市空間は生産・物流の支配空間として分節・再編されることになる。そして、その喉元にあたる台地の突端に佐渡奉行所が君臨したのである。このように相川の近世都市化は特定の場所の重層的な再編ではなく､上相川から始まって間ノ山､下町へと展開する「移動」あるいは「付加」の歴史であったことに注意しておく必要がある。これは日本の近世都市一般の傾向ともいえるが、相川の場合この展開はより直截的に、しかも短期間に進行した。

相川の原点ともいえる上相川が充分な都市的成熟を遂げる間もなく下町へ機能分散され、寛永以降の金銀山の不振とともに上相川はゴーストタウン化の兆しを見せ始める。都市の重心は下へ下へと移動し、近世の都市的蓄積はむしろ直接鉱山に依拠しなくても成立しうる浜沿いの町に結実する。角ばった岩石が川上から川下に向かうにつれて角が取れ、滑らかな石になるように、初期山師によって形成された山上の不規則な町々は、山を下りるにしたがって近世的な規則的な地割をもつ町へと変貌する。

上相川はやがて廃棄され、ゴーストタウンと化すが、これを相川の都市史の必然であったと断ずるのはやや早計であろう。上相川は鉱山都市の経済的・産業的側面からみれば、もはや無用の存在となったかもしれないが、相川のアイデンティティ、すなわち幕府直轄の金銀山＝相川の象徴は、一貫して上相川にあったはずである。

文化６年（1805）米値段の高騰によって上相川では後家騒動が起きようとしていた。「大工町ヨリ上相川町迄右町々後家住之者共儀、近年打続銀山不盛、別而去夏以来米直段高直ニ而営ミ方難渋いたし、是迄ハ少々所持之

家財売払身命相送候所、此末暮方手段尽果候」と窮状を訴え、米値段の引下げを歎願している（『佐渡国略記』）。上相川には、文政９年（1826）の「墨引」によると、銀山大工や銀山荷揚などの鉱山関係の労働者が高い比率で居住しており、鉱山の不振は彼らにとって極めて深刻な問題となっていた。家財道具を売却するなどなんとかして当地に留まろうとする努力も、米価の暴騰によって臨界点を越え、彼らは奉行所に米価引下げを迫ったのである。しかし奉行所はなんら有効な手立てを講ずることができなかった。上相川に往時の面影はもはやなかったが、金銀山の衰退にもかかわらず19世紀においても鉱山関係者が依然少なからず存在していたことは注目してよい。上相川には山の守護神＝山之神神社（大山祇神社）があり、相川に居住する民衆や相川に吸引される人々の脳裏にはつねにゴールドラッシュで活況を呈した盛時の相川のイメージがあったに違いなく、それは現在もかたちを変えて生き続けている。

以上、鉱山町・相川の原点としての上相川を中心に取り上げたが、上記のように相川は近世都市化する過程で、台地上から下町にかけていくつかタイプの異なる町を成立させた。これらは上相川の衰退ととって代わるように、相川の中心市街地として成長を遂げることになる。そして各町の形態や構成の違いは相川の都市史を直接に反映していた。　（伊藤　毅）

２．相川上町・下町の形成と変遷

（1）町絵図からみた都市の変遷

ｉ）鉱山・町絵図の描画年代調査

ａ　調査の目的

相川の町域は、16世紀末より相川金銀山の開発とともに急速に発展、形成された地域である。また、国内の他鉱山と比較して、文献史料に町の名前や規模などの記述が多く記載されていること、絵図史料が多数残されていることにより、町の歴史的変遷を大まかに類推することができる。このような作業には、当時の町域が描かれた絵図史料が基礎資料となるが、これらには製作された年代が書かれていないことが多い。このため、まず、これらの絵図の年代を明らかにするため、絵図に描かれた様々な情報を指標とし、描画年代[9]を推定する作業が重要となってくる。ここでは、近世の絵図を対象として、製作年代が書かれた絵図のほかに、製作年代が不明な絵図の描画年代を明らかにしたうえで、これらを用いて相

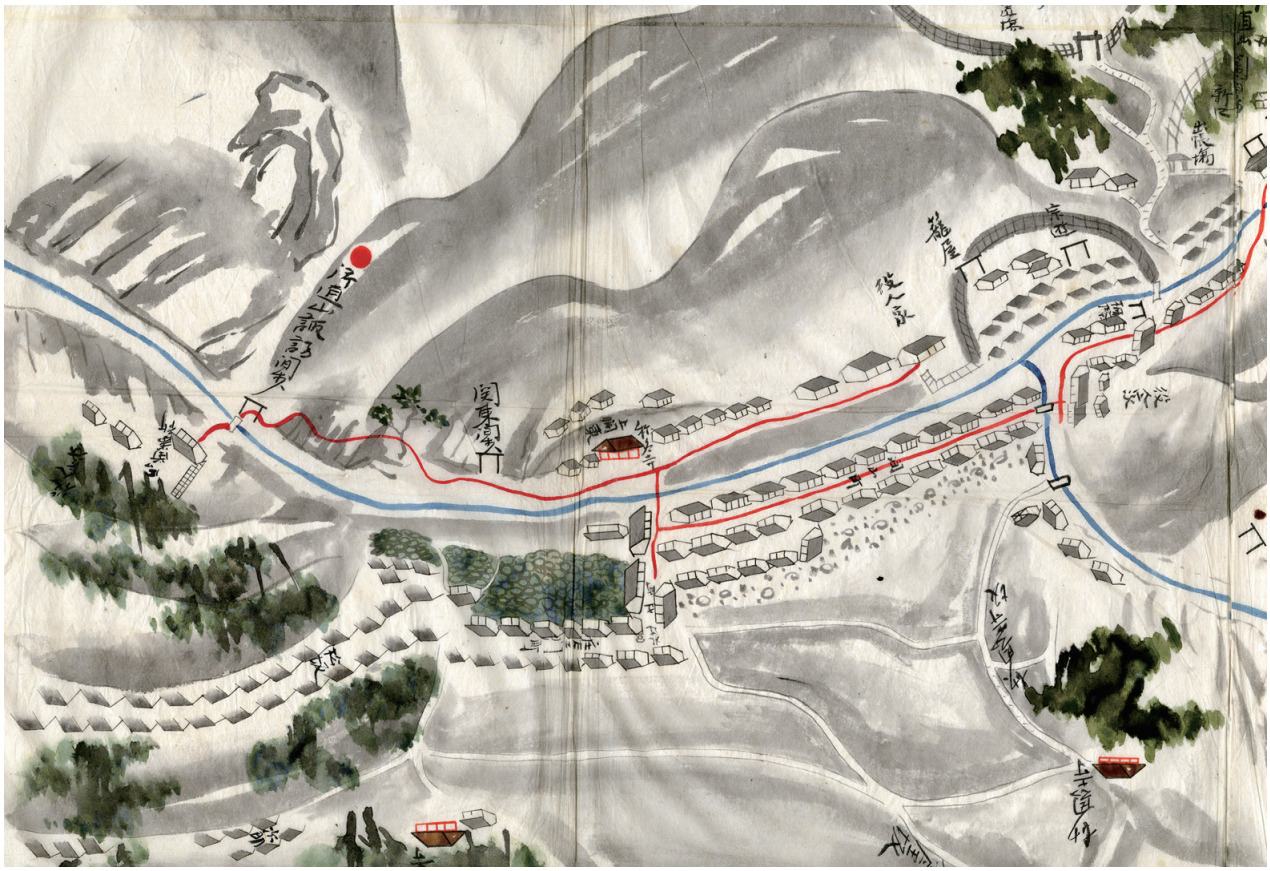


図５―３　町家の表記方法（１）（相川右沢左沢向山銀山図（部分））

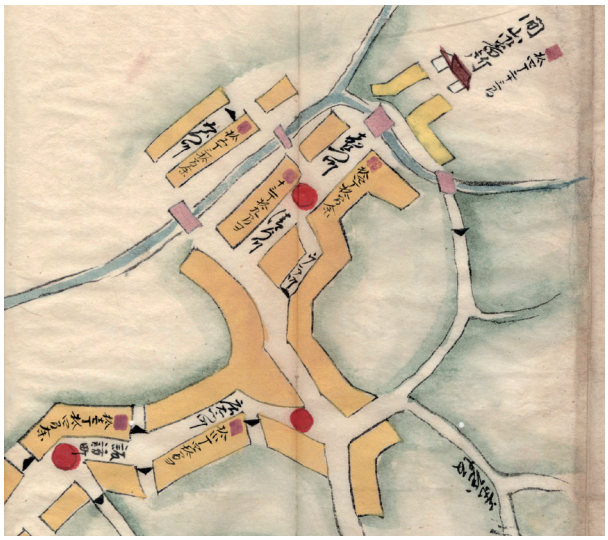


図５―４　町家の表記方法（２）（相川町々木戸絵図　部分）

川における町域の変遷過程を明らかにしようと試みるものである。

ｂ　鉱山絵図と町絵図

江戸時代に描かれた相川の絵図には、相川金銀山の様子を描いた「鉱山絵図」と相川の町を描いた「町絵図」がある。

鉱山絵図は坑外の様子を描いた「岡絵図」と坑内の様子を描いた「敷絵図」のほかに両者をあわせて描く「敷岡絵図」がある。岡絵図には、相川金銀山のみを描くものと、相川金銀山とあわせて金銀山近隣にあった間ノ山地区以東の相川の町家の様子を描いたものがある。鉱山絵図に描かれる町家は、建物を１棟ごとに描くものと、建物の範囲を描いたものの２種類がある（図５―３、４）。

町絵図は相川の町域全体（近郷の集落を含めたものも含む）を描くものと、ある事柄を特記するために必要な町域の範囲のみを描いたものがある。このほかに、相川金銀山の岡絵図と相川の町絵図がセットで描かれたものがみられる。

現在確認されている相川の絵図の多くは、相川金銀山の岡絵図もしくは敷絵図である。数量的にみると町絵図が単独で描かれるものは少ないが、なかには町々の木戸の位置を記した「相川町々木戸絵図」や火災の出火地点や被害状況を記した「安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図」、町ごとに町割や居住者の職種を記入した「相川町町墨引」がある。

現存する絵図のなかで、製作年代が明らかとなっているものはわずかであり、製作年代の不明なものが多い。製作年代が描かれているものの中では、元禄７年（1694）の記載がある「相川右沢左沢向山銀山図」、元禄８年２月７日の記載がある天保６年（1835）写しの「佐州相川之図」があり、年代の明らかなものの中では最も古い。上相川地区のみを描いたものとして、宝暦２年（1752）の元図を文化９年（1812）に調製した「上相川絵図」がある。町絵図では製作年代はないものの、安政５年（1858）の相川大火後の焼失範囲を描いた「安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図」がある。また、今回の調査対象年代からは外れるが、明治８年（1875）には、明治時代前期の相川の町並みを描いた「相川諸防地理之図」がある。

今回の調査では、これらの絵図のうち、広範囲にわたって町の範囲が描かれているものを中心に、絵図同士での照合ができるものを調査対象とした。

ｃ　描画年代の推定方法

年代不明な絵図の描画年代を推定するための指標としたのが、絵図に描かれた様々な情報である。これらの情報をもとに、他の文献史料に記載される内容との照合・検討作業をおこなった。幸い、相川には文献史料が多数残されていたため、これらの照合作業が容易であった。

描画年代を推定する指標として、下記の項目をもとに調査をおこなった（表５―１）。

間歩・排水坑道、四ツ留番所[10]

御直山[11]や自分山[12]などによって採掘がおこなわれていた間歩の稼働状況と、それに付随する四ツ留番所の有無、排水坑道（南沢疎水坑など）の有無をもとに、描画年代を推測するための指標とした。

番所

慶長期以降の相川町は、各地に番所が設置されている。このうち町域の出入口には上相川番所・柴町番所・下戸番所が置かれ、海岸部には大間番所・材木町番所・羽田番所が置かれた。また、相川金銀山への鉱区の出入口となる左沢に間ノ山番所、右沢に六十枚番所が置かれた。これらの番所の多くは江戸時代を通じて存続していたが、このうち、町域の衰退や採掘活動の休止等の理由により、上相川番所と六十枚番所の２カ所が18世紀に廃止されている。

上相川番所は、上相川地区の南東側出入口にあった番所で、慶長期に設置され、上相川の宝暦８年に廃止された。六十枚番所は相川金銀山の主要な鉱区のひとつであった右沢出入口にあった番所で、慶長期に設置され、寛政７年（1795）に廃止された。絵図では両番所の有無を確認し、描画年代を推測するための指標とした。

寺社

鉱山集落として形成された相川は、鉱山の景気によって人口が流動化しやすく、人口の減少にともなって寺院の転出や合併、廃寺となるものが多いことに特徴がある。これらの寺院の盛衰については、『佐渡相川志』や『佐

表５―１　年代不明絵図の描画年代推定のための調査項目表

区分		名　称	年代（西暦）	内　容
a	1	南沢疎水坑	元禄 10 年（1697）～	元禄４年（1691）より開削が始まり、元禄 10 年（1697）に完成した排水坑道。作業期間短縮のため、中間点に上ノ口、下ノ口が設けられ、６ヶ所から掘削がおこなわれた。江戸沢に坑口があった。
	2	茶屋平間歩	寛政３～宝暦元年（1743 ～ 1751）	寛政３年（1743）に取明けとなり、宝暦元年（1751）に休山。これ以降の採掘記録はない。
	3	末広間歩	天明３～寛政５年（1783 ～ 1793）	天明３年（1783）に取明けとなり、寛政５年（1793）に休山。これ以降の採掘記録はない。
	4	鶴子銀山の間歩	各時期	仕出喜間歩：天和２年（1682）開発～元禄９年（1696）頃も採掘、元文元年（1736）再興～寛延元年（1748）休止。 馳割間歩：延享２年（1745）開発～寛延４年（1751）休止。 弥十郎間歩：文化 12 年（1815）再興～御直山・御仕入稼ぎがおこなわれる。
	5	御直山・御仕入稼	各時期	絵図によって稼働を示す印が付される。時期によって稼働していた間歩が異なるため間歩の稼行が時期を示す指標となる。
	6	四ッ留番所	間歩稼働時期	坑口付近に設置され、人・物資の出入りなどを監視していた番所。絵図では稼働していた間歩の坑口付近に建物として描かれることが多い。間歩稼働の有無を示す指標となる。
b	1	上相川番所	慶長～宝暦８年（17 世紀～ 1758）	慶長期に上相川の南東側出入口に設置された番所。絵図には門のような建物として描かれることが多い。宝暦８年（1758）に廃止された。
	2	六十枚番所	慶長？～寛政７年（17 世紀？～ 1795）	相川金銀山の右沢出入口に設置された番所。絵図には門のような建物として描かれることが多い。寛政７年（1795）に廃止された。
c	1	遍照院	～元禄５年（1692） or　８年（1695）	下山之神町に所在した真言宗寺院で、元禄５年（1692）に廃寺。『佐渡相川志』では元禄８年（1695）に破滅とあり、時期にズレがある。
	2	広円寺	元和５～元禄 12 年（1619 ～ 1699）	上相川に所在した寺院で、元禄 12 年（1699）に転出した。
	3	善宗寺	～元禄 12 年（1699）	上町地域の六右衛門町に所在した浄土真宗寺院で、元禄 12 年（1699）に広円寺に合併した。
	4	大光院	慶長 12 ～元禄年中（1607 ～ 17 世紀末／ 18 世紀初）	上相川に所在した天台宗寺院で、元禄年中に転出した。
	5	覚性寺	元禄年中～（17 世紀末～18 世紀初）	元禄年中（1688 ～ 1704）に上寺町へ移転した日蓮宗寺院。
	6	称念寺	～正徳３年（1713）	相川金銀山の清次間歩の脇に所在した浄土真宗寺院で、正徳３年（1713）に紙屋町へ転出し、のちに下戸炭屋浜町に移転した。
	7	地蔵寺	～正徳６年（1716）	中寺町に所在した真言宗寺院で、正徳６年（1716）に相運寺に合併した。
	8	光照寺	～享保９年（1724）	相川金銀山の大切山間歩～日向間歩間に所在した浄土宗寺院で、享保９年（1724）６月２日の洪水被害により新町村（現在の真野新町）へ転出した。
	9	慈眼寺	～宝暦２年（1752）	中寺町に所在した真言宗寺院で、宝暦２年（1752）に沢根曼荼羅寺へ移転した。
	10	法蓮寺	～安政年中（1854 ～ 1860）	中寺町に所在した真言宗寺院で、安政年中に法念寺に合併した。
	11	法円寺	～安政年中（1854 ～ 1860）	下寺町に所在した浄土宗寺院で、安政年中に廃寺となった。
	12	西光寺	～慶応３年（1867）	上町地域の次助町に所在した浄土宗寺院で、慶応３年（1867）に焼失。源昌寺へ移転した。
	13	八幡神社	享保４年（1719）～	寛永元年（1624）に下山之神町南側（大山祇神社西側）に移転し、享保４年（1719）に現在地（下山之神町 46）へ移転した。
	14	神明社	延享３年（1746）～	古社地は北沢川向の山岸。延享３年（1746）に上町地域の現在地（相川夕白町 23）へ移転した。
d	1	鐘楼	正徳３年（1713）～	八百屋町に所在する時鐘楼で、正徳３年（1713）に建築された。
	2	御代官陣屋	宝暦４～明和５年（1754 ～ 1768）	羽田浜に所在した代官陣屋。佐渡代官（宝暦３～明和５年にあった役職）の設置に伴い、羽田番所があった場所に建てられた。
	3	銅床屋	明和７年（1770）～	一丁目浜町に所在した銅銭座請負いにより設けられた銭座。天明２年（1782）から官営となり、中絶時期があるものの幕末まで操業した。
	4	広恵倉	文政６～天保９年（1823 ～ 1838）	羽田浜にあった文政６年（1823）に建造された奉行所の交易機関で役所・倉があった。天保９年（1838）に廃止された。
e	1	火事	安政５年（1858）	相川は度々火災の被害を受けているが、安政５年（1858）７月 27 日に発生した相川大火は、奉行所を含め町域の多くが焼失した。
	2	その他歴史的事項	―	絵図中に奉行名等の年代を推定するものが書かれている。
f	1	製作年の有無	―	絵図によって製作年代が書かれているものがある。

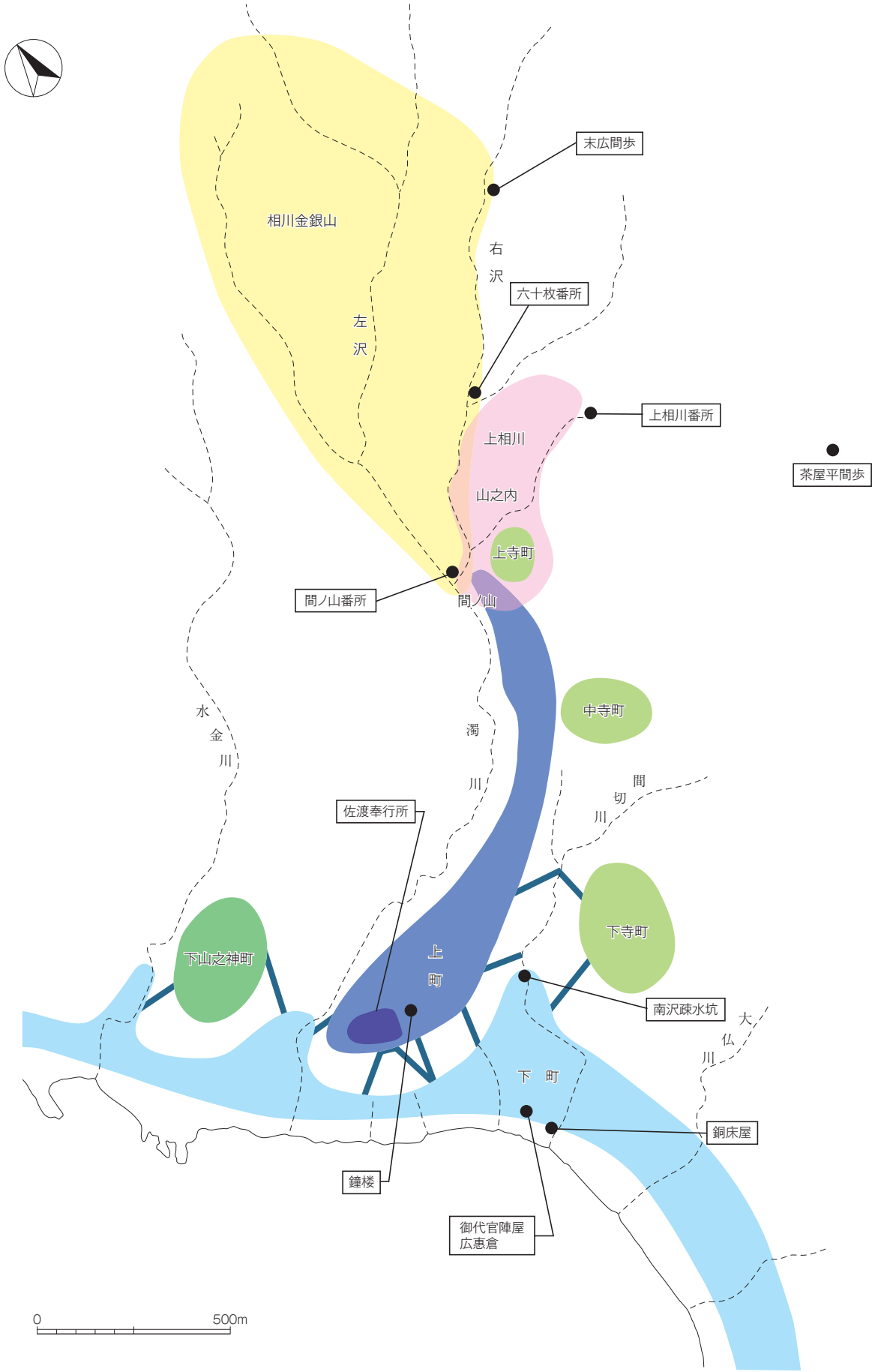


図５―５　相川金銀山と町の分布概略図

図５―６　佐渡奉行所と鐘楼（相川町々并銀山岡絵図）

図５―７　御代官陣屋（相川町絵図）

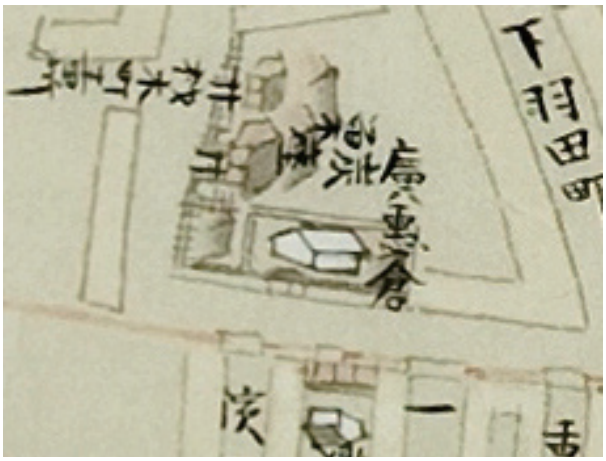


図５―８　広恵倉（相川町々并銀山岡絵図）

渡国寺社境内案内帳』などの文献史料に年代が記載されるものが多いことから、絵図に描かれた寺社の有無や転出にともなうこれらの位置情報が、絵図の描画年代を推測するための指標となった。

町域内に建設された存続期間の明らかな施設

江戸時代の相川の町域には、奉行所の組織改革や事業等にともなって様々な施設の建設がみられる。これらのうち、建築年と存続期間が明確な施設がある。

上町地域の八百屋町に建てられた鐘楼は、正徳３年（1713）に建てられた時を告げるための時鐘楼であり、建築年以降に製作された絵図にその姿が描かれている（図５―６）。下町地域の羽田浜に建てられた御代官陣屋は、宝暦３年（1753）の佐渡代官職設置にともなって、翌年に建設された代官用の陣屋で、明和５年（1768）の代官職廃止まで存続した（図５―７）。文政６年（1823）には御代官陣屋があった場所に、奉行所の交易機関であった広恵倉が建設され、天保９年（1838）まで存続した（図５―８）。

このような施設の有無を確認し、描画年代を推測するための指標とした。

歴史的事項

相川は度々火災の被害を受けており、佐渡奉行所も江戸時代に５回被害を受けるほど、火災が多かった地域である。『佐渡年代記』や『佐渡国略記』などの文献史料にも火災の被害についての記述がみられるが、なかには火災の被害状況を描いた絵図がある。この他にも、絵図中の佐渡奉行名や絵図を製作するための要因となった文献史料を対象とすることで年代を特定できることがあるため、これらの歴史的な事項を絵図の描画年代を推測するための指標とした。

製作年代の有無

調査対象とした絵図のなかには、絵図中に製作年代が書かれているものがみられる。絵図のなかには後世の写しもあり、製作年代と描画年代にずれが生じる可能性があることから、絵図中に描かれた内容については、上記の各項目をもとに描画年代の確認をおこなった。

ｄ　絵図の描画年代推定

調査対象とした絵図史料は 27 点である（表５―２）。これらの絵図には、17 世紀初頭から 17 世紀後半の絵図史料はみあたらないため、絵図史料から当該時期の町域の変遷過程をたどることは難しいと判断される。絵図の年代は元禄期の南沢疎水坑開削前後のものがみられ、このほかの絵図は 18 ～ 19 世紀に描かれたと推定されるものが多い。また、18 世紀末以降からは、鉱山絵図と町絵図がセットで描かれたものがみられるようになる。

現在確認されている町域の描かれた鉱山絵図や町絵図（表５―２）のなかで、描画年代がもっとも古いものは、鉱山絵図では前述した元禄７年（1694）の「相川右沢左沢向山絵図」であり、町絵図では「元禄８年仲春（２月）７日静野與右衛門親章撰之」の記述がある「佐州相川之図」であった。後者は天保６年の写しであるが、元図の

表５―２　絵画の推定描画年代と推定根拠

№.	絵　図　名	所有者	内　　容	年　　代	年代推定の根拠
1	相川右沢左沢向山銀山図	㈱ゴールデン佐渡	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	元禄７年（1694）	⑤製作年代が記載。
2	佐州相川之図	個人	町絵図（近郷の村は省略）	元禄８年（1695）	⑤製作年代が記載。 天保６年（1835）の写し
3	佐州相川敷岡振矩絵図	東京大学	鉱山敷岡絵図＋町絵図	元禄８年（1695）	⑤製作年代が記載。
4	佐州相川敷岡振矩絵図	東京国立科学博物館	鉱山敷岡絵図＋町絵図	元禄８年（1695）頃	№.３と同一構図＝写し？
5	佐州相川敷岡振矩絵図	㈱ゴールデン佐渡	鉱山敷岡絵図＋町絵図	元禄８年（1695）頃	№.３と同一構図＝写し？
6	相川町図	岩木文庫	町絵図	17 世紀末？	①南沢疎水道の名称が「水貫新切山」となっている。 ④鐘楼なし。
7	相川金銀山岡絵図	相川郷土博物館	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	17 世紀末～ 18 世紀初？	①末広間歩なし。 ②称念寺・光照寺あり。
8	相川町々木戸絵図	個人	町絵図（近郷の村は省略）	18 世紀前？	絵図中に「先年小浜志摩守…」の記述あり。 ④鐘楼あり。
9	上相川一筆絵図	舟崎文庫	町絵図（上相川東部のみ描画）	18 世紀前？	⑤享保 18 年（1733）に上相川の農地転用願いを提出し、役人が見分した際のもの。
10	銀山岡絵図	佐渡市	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	寛保３～延享４年（1743 ～ 1747）	①茶屋平間歩が稼働。
11	銀山岡絵図	舟崎文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	延享４年（1747）	⑤製作年代が記載。
12	御直山鉱山岡絵図	舟崎文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	延享４年（1747）	⑤製作年代が記載。
13	上相川絵図	相川郷土博物館	町絵図（上相川のみ描画）	宝暦２年（1752）	⑤製作年代が記載。 文化９年（1812）調製
14	相川町絵図	個人	町絵図	18 世紀中	②上相川・六十枚番所あり。 ④鐘楼あり、代官陣屋なし。
15	鉱山金坑絵図	舟崎文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	18 世紀中 宝暦２～７年（1752 ～ 1757）	①茶屋平間歩が未稼働。末広間歩なし。 ②上相川・六十枚番所あり。
16	相川町絵図	佐渡市	町絵図	18 世紀中 宝暦３～７年（1753 ～ 1757）頃	②上相川・六十枚番所あり。 ④鐘楼あり、代官陣屋あり。
17	相川町々及銀山岡絵図	九州大学資源工学科	鉱山絵図＋町絵図	寛政６年（1794）	⑤製作年代が記載。
18	相川金銀山立合引古絵図	舟崎文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	18 世紀末～ 19 世紀中？	⑤製作年代が記載。 弘化２年（1845）の写し
19	相川金銀山立合引	舟崎文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	18 世紀末～ 19 世紀中？	嘉永６年（1853）の写し ⑤製作年代が記載。
20	佐州金銀山立合引絵図	『佐渡金銀山史話』所収	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	18 世紀末～ 19 世紀中 寛政８～慶応４年（1796 ～ 1868）	①茶屋平間歩・末広間歩が未稼働。 ②六十枚番所が廃止。
21	立合引銀山岡絵図	国立科学博物館	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	18 世紀末～ 19 世紀中 寛政８～慶応４年（1796 ～ 1868）	①茶屋平間歩・末広間歩が未稼働。 ②上相川・六十枚の両番所が廃止。
22	佐州金銀山立合引絵図	個人	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	18 世紀末～ 19 世紀中 寛政８～慶応４年（1796 ～ 1868）	①茶屋平間歩・末広間歩が未稼働。 ②六十枚番所が廃止。"
23	立会引銀山岡絵図	長岡市立中央図書館反町茂雄文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	19 世紀前 文政７年（1824）頃	①茶屋平間歩・末広間歩が未稼行。甚五間歩が雲子間歩とされている。 ②六十枚番所が廃止。
24	相川町々并銀山岡絵図	長岡市立中央図書館反町茂雄文庫	鉱山絵図＋町絵図	19 世紀前 文政６～天保９年（1823 ～ 1838）	①末広間歩が未稼働。 ④広恵倉あり。
25	相川町々并銀山岡絵図	赤石家文書	鉱山絵図＋町絵図	19 世紀前 文政６～天保９年（1823 ～ 1838）	①末広間歩が未稼働。 ④広恵倉あり。
26	相川銀山立合引并新切山立場所絵図	舟崎文庫	鉱山絵図（諏訪町以東の町屋も描画）	19 世紀中 天保 12 年（1841）	⑤製作年代が記載。
27	安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図	㈱ゴールデン佐渡	町絵図	19 世紀中 安政５年（1858）頃	④安政５年（1858）の大火後の被害状況を描く。

描画年代は元禄期のものである。いずれも後世の絵図では衰退傾向にあった上相川地区の町域が広く描かれているほか、元禄期に転出していった寺院が描かれている点に特徴がある。

一方、17 世紀末頃のものと推定される「相川町図」は、着色部分の発色具合から後世の写しであると考えられる。絵図の内容をみると、南沢疎水坑出口に「水貫新切山」の記載があること、六十枚番所や上相川番所が設置されていること、上寺町に覚性寺がないこと、上町地域に鐘楼がないことから、元図は元禄９年（1696）頃のものではないかと推定されるものの、下山之神町の八幡宮が享保４年（1719）以前の旧社地より現在地へ移転していることから、元図を参考にして後世に絵図を作製する際、本来その時代には存在しないはずの建物が描き残されている可能性が指摘できる。同様に「相川町絵図」においても、八百屋町（上町）に鐘楼が建てられており、下羽田町（下町）に宝暦４年（1754）に建てられた御代官陣屋、宝暦８年に廃止となる上相川番所・六十枚番所の建物が描かれるが、下山之神町の八幡宮が旧社地のまま描かれていることから、享保４年以前の絵図を元図にしている可能性が指摘できる。

近世絵図のうち最も新しいものは、安政５年（1858）頃に描かれたと推定される「安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図」や明治時代の大立竪坑の位置などを示す貼紙が付属する「佐州金銀山立合引絵図」などである。

ii）町域の変遷と今後の課題

17 世紀初頭～後期については、絵図が確認されていないため、絵図をもとにした町域の変遷はたどれないが、それ以降となる 17 世紀末～ 19 世紀の描画年代を推定した絵図のうち、17 世紀末（表５―２―２）・18 世紀中半（表５―２―14・15）・19 世紀前半（表５―２―23）・19 世紀中半（表５―２―27）の代表的な絵図を使用して、町域の変遷をたどりたい。

江戸時代初期の相川の町は、金銀山に近い場所で、周辺の木を伐って、掘立による「山小屋」と呼ばれる住居を建てていたとされ、鉱山の景気によって移動しやすい居住形態がとられていた。その後、大久保長安により相川が府中となると、人家も定まったとされている（『佐渡古実略記』）。最も早く集落が形成されたのが、相川金銀山の南側に立地する上相川や間ノ山がある山之内と呼ばれる地域で、大久保長安の代官職就任以降に上町地域と下町地域の町割が整備されたと考えられる。

また、『佐渡四民風俗』によれば、相川の町並みは寛永６～７年（1629 ～ 1630）に一町目より下戸町まで町割

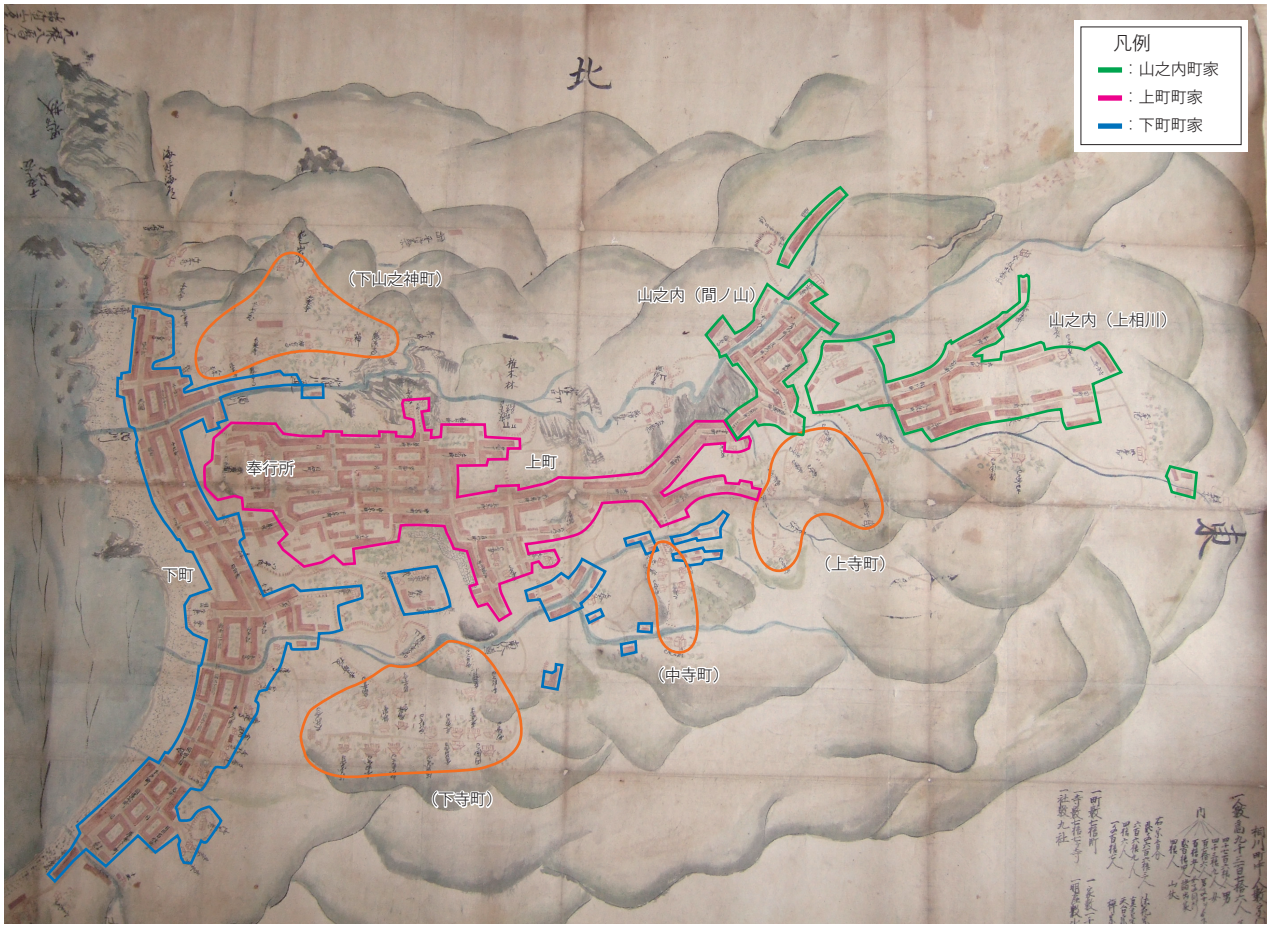


図５―９　17 世紀末：元禄８年（1695）の相川の町域（佐州相川之図）

が、正保２年（1645）に羽田町札の辻より海府番所までの町割ができたとあり、元和年中（1615 ～ 23）の相川地子銀等の様子から、往古は銀山近辺の居住を第一としたことで、下通り（下町）には銀山と関係が無いものばかりが居住したので町並みが遅くできたのではないかと推察しており、元和４年（1618）の家数を約２万 1700 軒余としている。また、『佐渡年代記』の寛永６年（1629）の項に相川の町数 72 町に新地を加えて 80 町であることが書かれている。

ここで、絵図史料をもとに町並みの変遷過程をみてみる。17 世紀末の山之内地域は、上相川地区の山之神町・田町・茶屋町・奈良町、間ノ山地区の清右衛門町裏町があるほか、銀山町や南沢町に町域が認められる（図５―９）。これが 18 世紀半ばになると、上相川地区・間ノ山地区などの相川金銀山に近い場所で町域の減少が認められるが、一方で海岸線沿いの下町地域の浜町・下戸浜町が新たに誕生し、海岸部での町域の拡大が認められる（図５―１０・１１）。19 世紀前半になると、上相川地区の本町・九郎左衛門町・鍛冶町以東と茶屋町・柄杓町以西の町域と、間ノ山地区の清右衛門町裏町の通り、中寺町の町域などが消滅しており、山之内地域の急速な衰退を物語っている。この頃になると、海岸部での町域の拡大が少なくなる傾向がみられ、水害後の北沢町で濁川左岸に新たな町域が誕生している（図５―１２）。19 世紀半ばは、絵図の描画範囲の影響から、上相川地区以東・羽田町以南は不明であるが、間ノ山地区の五郎右衛門町（濁川右岸）・下山之神町・南沢町・六右衛門町で町域の減少が認められるほか、妙法寺・覚性寺・妙輪寺・大光院などのいくつかの寺院が転出及び廃寺となっており、上寺町・下寺町・下山之神町における寺域の縮小が認められる（図５―１３）。その後、山之内地域では、明治 26 年（1893）の大塚部屋の移転を境に銀山町が廃絶したほか、明治 30 ～ 40 年代に上相川地区の町が廃絶している。

17 世紀末から 19 世紀半ばまでの絵図史料にみる町域の変遷過程は、山之内地域などの相川金銀山に近い地域から町域が急速に減少した一方、海岸線沿いの下町地域では埋立てによる町域の拡大が認められた。このような町域の変遷は、同時代における相川金銀山の鉱石産出量・金銀生産量の低下に密接な関わりがあり、鉱山の衰退とともに山間部の町域が減少し、海岸部で増加していることがわかる。

今回の調査では、絵図を細部まで観察する時間的余裕が無かったことで、指標となる項目がやや不十分となり、絵図の描画年代幅を絞り込むことができなかったこと、絵図が確認されなかった元禄６年（1693）以前及び明治時代以降を調査対象としていないことから、金銀山の発見から現在までに至る町域の変遷過程を類推することができなかった点が課題として残されてしまった。また、

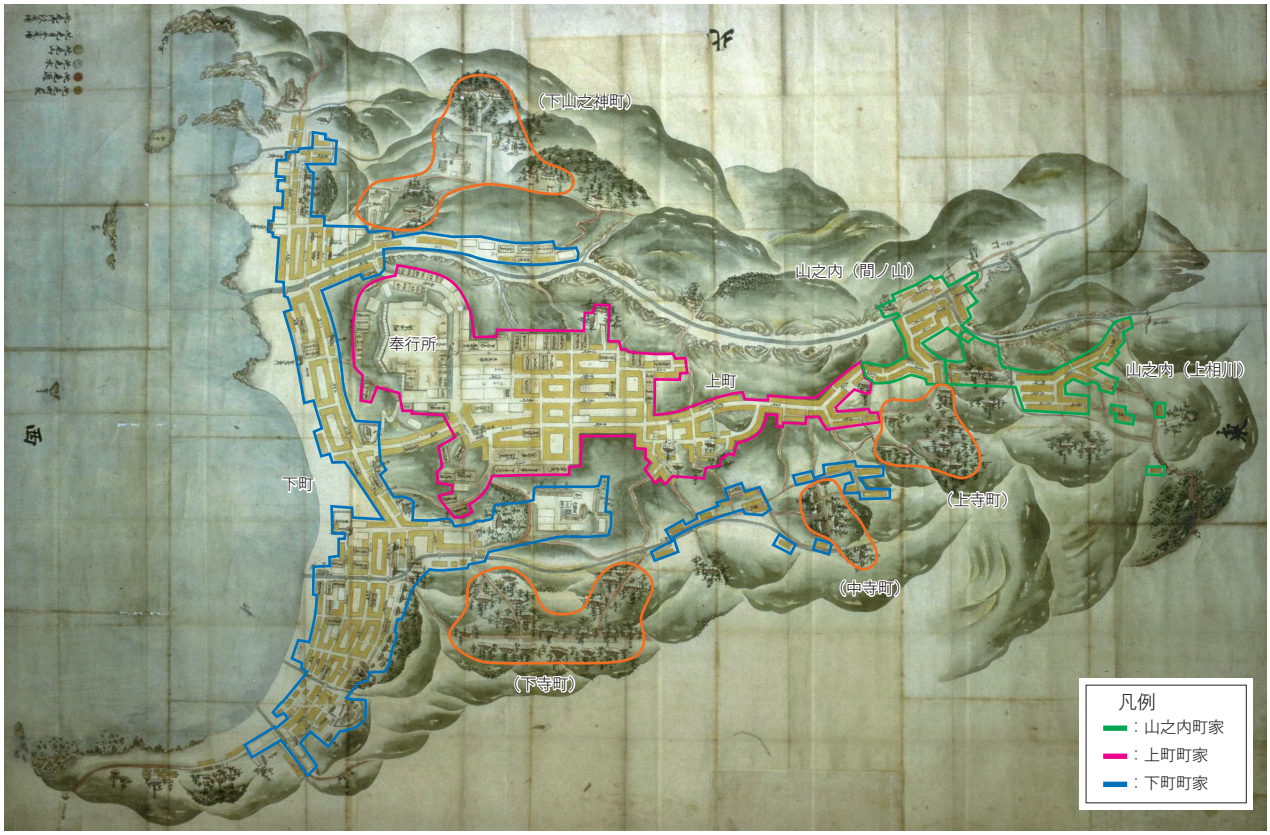


図５―１０　18 世紀中頃の相川の町域（１）（相川町絵図）

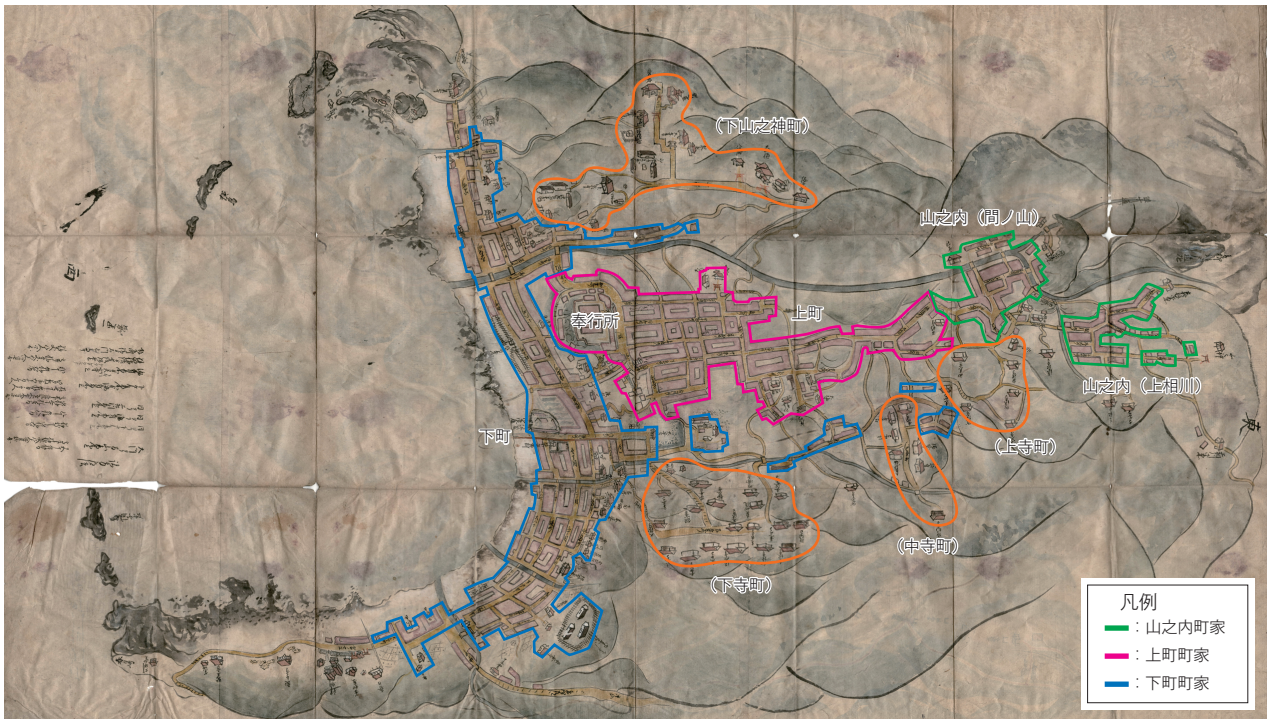


図５―１１　18 世紀中頃の相川の町域（２）（相川町絵図）

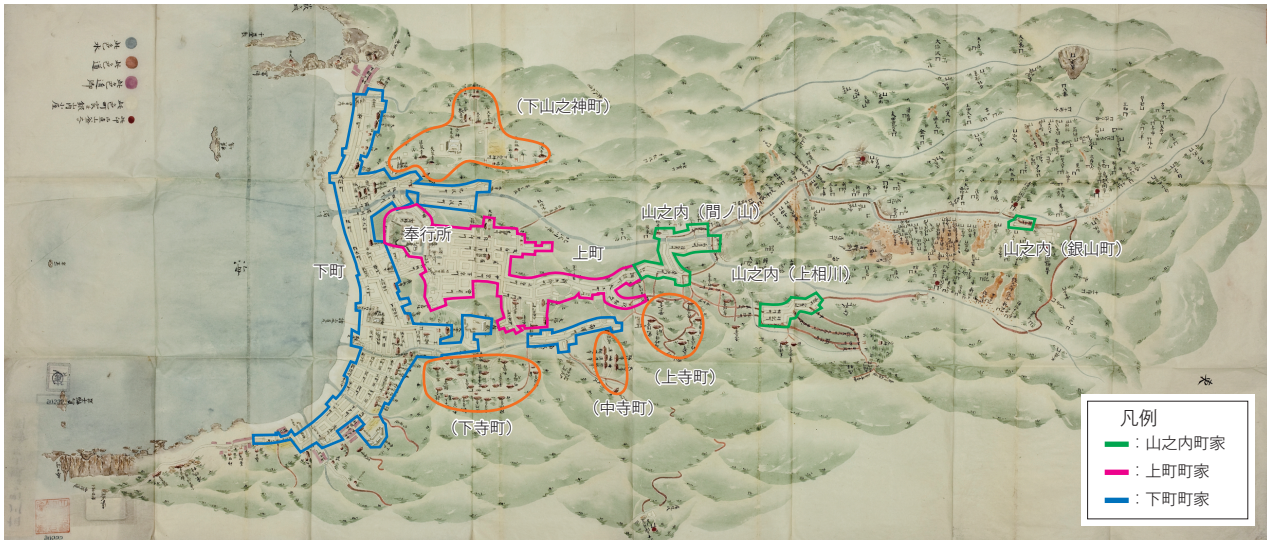


図５―１２　19 世紀前半：文政６年～天保９年（1823 ～ 1838）の相川の町域（相川町々并銀山岡絵図）

将来的に未発見の絵図が存在する可能性もあり、新たな絵図の発見によって、より詳細に変遷過程を類推することが可能となるため、今後も継続的に調査をおこなう必要があると考えている。（宇佐美亮）

（2）上町・下町の変遷

ｉ）「安政五年屋敷帳」と明治地籍図による地割復原

（図 5―２３～５９参照）

ａ　地割復原作業の目的

相川の都市史・都市構造は、町絵図が多数残ること、そして文政９年（1826）の町墨引図により地割から居住者、職業までが判明することにより、歴史的変遷が他都市に比して詳細に知られる点にひとつの特徴がある。相川の都市的価値は、現在の都市景観の価値に加え、詳細に知られる歴史的変遷それ自体にもあると考えるべきであろう。

相川の地割の変遷については、これまで、文政９年「相川町　町墨引」（以下「文政墨引図」と略記）によって考察されてきた。相川の町域全体が記されたこの絵図により、文政期の地割を具体的に知ることができるが、ここには敷地規模を示す数値情報が含まれていないため、復原が感覚的なものにならざるを得ない点に問題があった。相川には、町内の全屋敷の規模を記した資料が残されており、これら諸史料を付き合わせることで、都市変遷をより正確に、そして可能な限り多くの時代に渡って

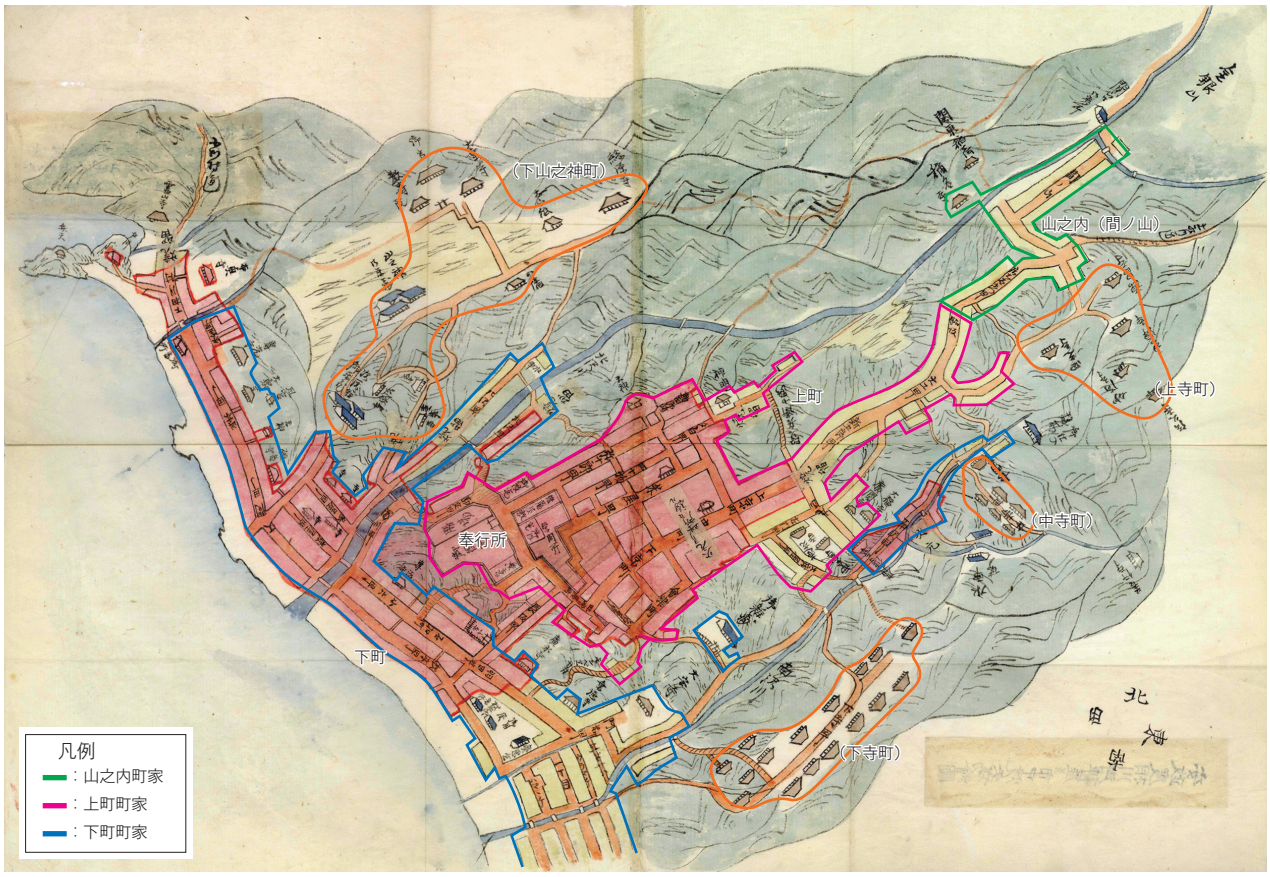


図５―１３　19 世紀中頃：安政５年（1858）頃の相川の町域（安政度相川御陣屋并市中焼失場絵図）

把握することが可能になる。この作業により、都市相川の価値をより確固たるものにすることができるはずである。

b　復原の根本史料

数ある相川の地割復原のための史資料のうち、正確な数値情報を有し、復原の根本史料となるのが、安政５年（1858）に作成された「安政五年十月屋敷帳」（相川郷土博物館所蔵、以下「安政屋敷帳」と略記）である。この史料は、相川全 70 町の各屋敷地の明細帳で、敷地間口と奥行、元禄検地時の所有者と現所有者が記載されている。隣接敷地との関係も記載されているため、地割復原の上で極めて有効である。現在、上相川―大工町までの 26 町分が『佐渡相川の歴史』資料集５　二見・相川近世文書に翻刻されているが、他は未翻刻である。よって、未翻刻の町分の翻刻をおこなった。

「安政屋敷帳」を地図上に落とし込むにあたっての下敷きとなるのが明治中期作成の地籍図である。新潟大学堀研究室により、この地籍図を GIS 上に落とし込む作業が既に完了しているので、このデータを活用し、「安政屋敷帳」復原に際しての下敷きとした。

c　復原年代

「安政屋敷帳」と明治期地籍図を根本史料とする地割復原により、両時代だけでなく、以下の各年代の復原が

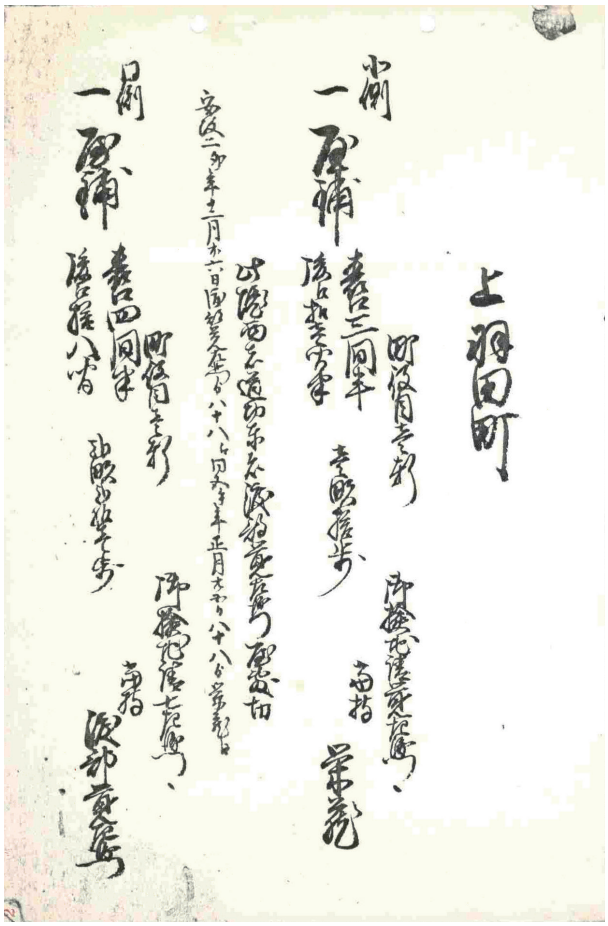


図５―１４　安政五年十月屋敷帳（上羽田町）

可能となる。

元禄期：「元禄検地帳」記載内容と「安政屋敷帳」記載内容とは、すべてに対応が付けられているため、元禄期の地割復原が可能である。なお、「安政屋敷帳」からは、宝暦年間（1751 ～ 63）にも同様の屋敷帳が作成されたことが知られるが、この際の屋敷帳はごく一部しか現存しないようである。

文政期：「文政墨引図」は、相川町全域にわたる地割と居住者、職業が記されている希有な史料であるが、地割の寸法は必ずしも正確ではない。居住者には、「安政屋敷帳」と共通する人物が多数認められるので、これらを頼りに、安政期から遡って地割を復原する。

安政期：「安政屋敷帳」により復原される。

明治期：地籍図によって復原済み。

昭和期：昭和４年（1929）家屋台帳により、明治地籍図を修正して復原される。

現在

すなわち、元禄→文政→安政→明治→昭和→現在における地割と住人の変遷図が作成できることになる。調査研究では、文政期、安政期の復原を実施した。

ｄ　復原の方法と手順

「安政屋敷帳」に基づく復原にあたっては、以下の方法と手順で実施した。

１．「安政屋敷帳」の翻刻。ただし、別表の通り、「安政屋敷帳」には一部の町で欠がある。

２．「安政屋敷帳」の記載と「文政墨引図」の記載を対照させ、大まかな位置関係を把握する。特に、以下の内容に留意して両史料の重ね合わせをおこなった。

・町境の特定。

・隣接地が道ないし川の家屋を特定。

・「安政屋敷帳」と「文政墨引図」の作成年代差は32年であり、両図の同位置に同一人が居住している例が多数あるので、それらを特定。

・敷地奥行の突出など、特異な土地形状の敷地を特定。

３．明治地籍図上に、「安政屋敷帳」データを手描きで落とし込む。「安政屋敷帳」は間単位で記されているため、実寸からは若干の誤差がある。誤差については、明治地籍図の地割線を優先して吸収した。

４．「安政屋敷帳」に欠のある町については、上記手順における文政期地割復原を参考に、「文政墨引図」を直接明治の地籍図と対照して復原した。これらの町は上町の下京町一帯に集中しており、復原に当たっては、明治20年（1887）の土地台帳、昭和４年の家屋台帳より、土地の所有関係をすべて確認し、明治の筆境に対する詳細な再検討を加えた上で、「文政墨引図」の情報を重ね合わせた。

５．手描きでの作業を踏まえて、地籍図データを入力したGIS上で復原地割を描画し、各時代のレイヤーを重ねていく。

なお、上相川、大工町、三町目については、時期の異なる詳細な町絵図が残されており、これらも参照しながら、より正確な復原を心がけた。

ｅ　復原作業の順序

上相川、大工町、三町目については、「安政屋敷帳」、「文政墨引図」以外にも詳細な町絵図が残されており、より精度の高い復原が可能となる。よって、これらの地区の復原を先行して実施した。

三町目には文政３年（1820）の「御検地新地屋敷絵図」が、大工町には文政～天保期作成の屋敷絵図（冨田家所蔵）がそれぞれ残されている。これらの絵図を参照しつつ、上記の「安政屋敷帳」に基づく復原を進めたところ、両町とも、屋敷絵図と「安政屋敷帳」とが概ね一致することが確かめられ、「安政屋敷帳」を用いた復原の妥当性がここに認められた。

ｆ　上相川の復原

続いて、多数の絵図が残る上相川の復原に着手した。

上相川に関しては、「文政墨引図」及び「安政屋敷帳」に加えて、宝暦２年（1752）作成の「上相川絵図」から地割と人名が判明するため、他地域に比べて一段階古い時期の復原が可能となる。また、18世紀前半の作成と推測される「上相川一筆絵図」より、上手にあたる東半部の地割状況を補足することが可能である。

上相川は斜面に石垣を築いて宅地が造成されているため、平面実測の成果が狂いやすく、江戸期の町絵図はもとより、明治地籍図においても、特に斜面上部では大きな誤差が生じている。実際、「安政屋敷帳」に記載される寸法は、下手では比較的合致するものの、上手では大きな誤差を生じている。この誤差の問題を埋めるため、平成17年度及び18年度に実施された上相川テラス分布調査に際して測量された上相川の現況地図を用いて、明治地籍図を修正しつつ、調査で確認されたテラス規模と対照させながら安政期地割の復原を進めた。

ｇ　地割復原の成果

以上の方針と手順に基づき、相川町域全体の地割を復原した（図５―２３～５９参照）。

地割復原は、すべてGISデータとして作成している。明治地籍図と現況地籍を入力したGISデータに、文政期と安政期のレイヤーを重ねた。各レイヤーに、敷地ごとに間口･奥行寸法、居住者（所有者）、職業（文政のみ）

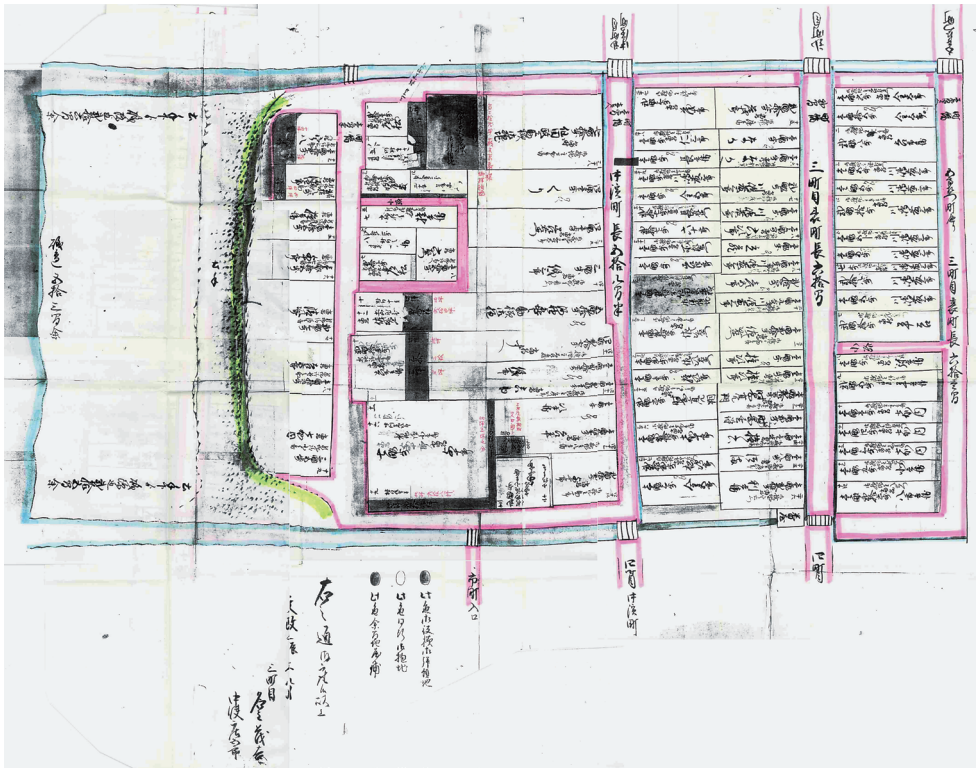


図５―１５　御検地新地屋敷絵図（文政３年＝ 1820、三町目）

図５―１６　大工町屋敷絵図（文政～天保期＝ 1818 ～ 43）

の情報を入力している。

ｈ　復原作業の問題点

地割復原につき、以下の問題が残されている。

・明治中期地籍図がなく、GIS データが作成されていない町については復原作業をおこなっていない。

・家屋が密集していなかった町（特に上相川の下手にあたる奈良町、茶屋町等）や高低差が大きい町では、「安政屋敷帳」に基づく復原が困難である。

・地形に高低差が大きい箇所（上相川、上町台地の崖部）は、明治地籍図の寸法に不正確な面があり、GIS データもそれを反映して誤差が大きくなっている。

ⅱ）上相川、上町・下町の都市構造とその変遷

ａ　地割復原図作成の意義と分析の視角

地割復原図の作成により、これまで相川全域を記した

町絵図を頼りに概念的に捉えられてきた相川の都市構造を、具体的な数値を元にして分析する基礎が提示できることになる。この復原図は、都市相川の価値を担保する重要な要素として位置付けられることだろう。また、相川に多数残る町絵図を読解する上での新たな視点を提供することになろう。

復原図分析の視覚として、次のような点が考えられる。

・地割及び土地利用の変遷とその傾向。

・上相川の形成原理の解明。

・上町、下町の形成過程の解明。

b　地割復原図の分析

地割復原図が作成されたことで、町ごとに都市構造、

図５―１７　上相川一筆絵図（18 世紀前半）

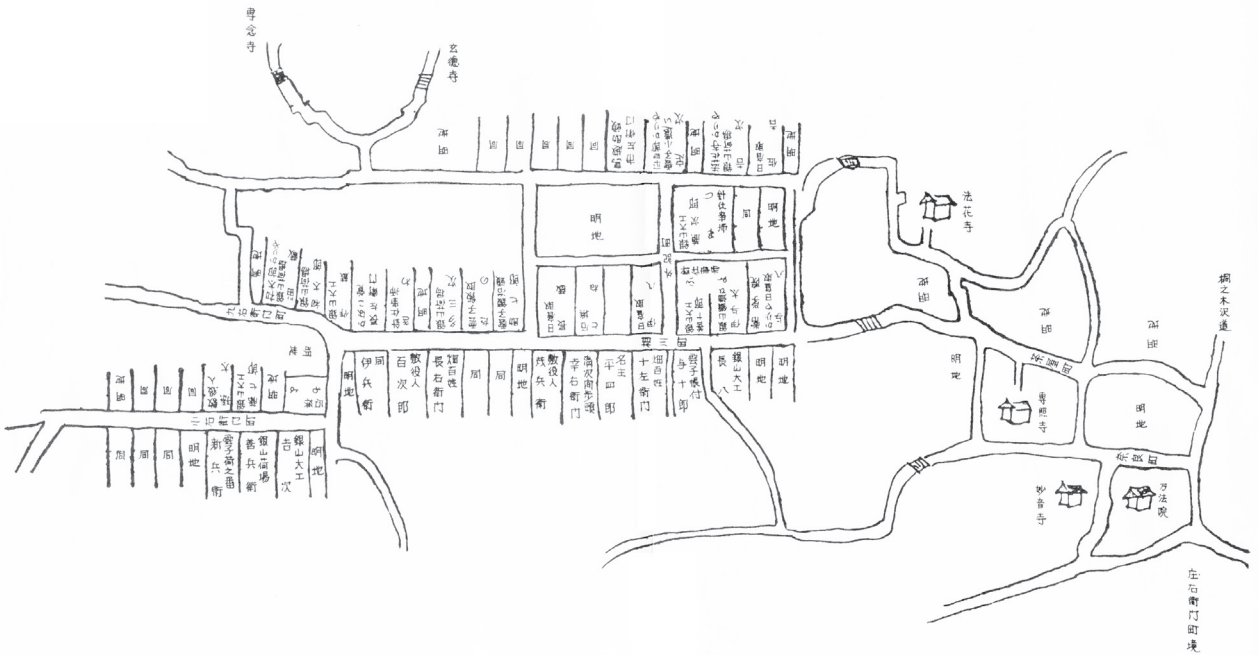


図５―１８　相川町　町墨引（文政９年＝ 1826、上相川）

土地利用と居住者の変遷を詳細に分析することが可能となった。以下、土地利用と地割変遷の全体傾向、上相川の形成過程、上町・下町の形成過程の順で論ずる。

土地利用及び地割の全体的傾向

相川の町域は、今回復原した文政及び安政期から明治に至るまで、上相川を除いてほぼ同規模を保っている。上相川は徐々に空地化が進むものの、そのほかの地区は宅地で埋め尽くされており、空き地もほぼみられない。現況では上町に多くの空き地がみられるが、これは明治以降、特に昭和戦後における金銀山経営の縮小にともなう人口流出の結果である。

近世から近代への転換における大きな変化は、上町における奉行所をはじめとする金銀山支配関連施設と役人拝領屋敷が失われ、他の施設に転換したことである。金銀山支配関連施設は、裁判所、学校等の公共施設となっていく。役人拝領屋敷は一般住居に転化し、あるいは三菱鉱山の社宅が建設された。個々の建築形式が一変した箇所もあり、視覚的に相川の近代化を印象づける変化だったと評することができるものの、金銀山経営という面からすれば、同位置で近世の奉行所支配から近代の三菱鉱山による経営に入れ替わっているだけともいえ、都市構造上の変化はほぼなかったといえる。

住民については、近世から近代への転換の中で、同一家系が同所に居住している例が少ない点が特徴的である。明治から昭和初期にかけては同一家系が居住している例が多々みいだせるが、その後は再び大きく入れ替わっている。

すなわち、相川は、都市構造を保持しながら、都市住民が流動的に入れ替わる都市であったことが確認される。

地割については、文政、安政、明治を通して、概ね基本的な形状が保たれている。合筆、分筆による間口の大規模化及び細分化はみられるものの、奥行方向には大きな変化がみられず、町立て以来の都市構造が概ね保たれているとみられる。

上相川の都市構造とその変遷

上相川の都市構造概要　上相川は、慶長６年（1601）に相川金銀山が発見された当初に、山師らによって開拓されて形成された鉱山集落である。大久保長安が慶長９年に半田清水が窪の地に陣屋を築き上町及び下町が町立てされてからも、金銀山稼ぎのための「山小屋」として機能し続けた。その後、徐々に居住者が減少し、18 世紀前期には大山祇神社に近い西側一帯の多くの空き敷地が畑地に替えられたものの、江戸時代を通じて居住は続けられた。明治以降さらなる衰退を遂げ、無住の地となった。現在は建物がすべて失われ、遺跡化している。

上相川は、西下がりの傾斜地に形成されている。東端の最高部に鎮座する大山祇神社から平行する２本の道が西へ降り、さらにその外側に平行する道が数本通る。これらの西下がりの道の両側に旧屋敷地が間隔を空けずに配される。西寄りの相川町と床屋町の周辺は比較的勾配が緩くなり、両町間の外記町は格子状に道が通されている。

上相川の町場と上町の間はさらに勾配の急な坂道となり、柄杓町、奈良町、茶屋町といった町が形成され、間ノ山地区を経て上町の諏訪町、大工町へと至る。

既往の上相川形成過程の分析　慶長期の短期間に形成されたとみられる上相川の町立ての過程については、『佐渡年代記』等の記述、そして 18 世紀前半作成とみられる「上相川一筆絵図」及び宝暦２年（1705）作成、文化９年（1812）複製の「上相川絵図」をはじめとする絵図類によって分析されてきた。平成 17 年度及び 18 年度には佐渡市教育委員会により上相川テラス分布調査が実施され、個々の敷地の具体的な形状が明らかにされ、既往の分析を一歩進めている。

これらの既往の分析では、大山祇神社の創建年（慶長６年）が知られる他、上相川内の各町名より、「本町」が最初期の町立てになること、各町が山師の名より命名されていること、茶屋町辺りに早くも慶長年間（1596 ～ 1614）に歓楽街が形成されていたことなどが語られている。しかし、各町の形成順序や地割の特徴などについては論じられていない。建築物については、『佐渡年代記』の記述にある「吉野作り」、すなわち谷地において大木を渡してその上に家を建てる形式が存在したことが知られているが、これは同書に「南澤北澤水金澤山之神辺なと」の空き地のない谷地形のところ、と書かれており、上相川の小屋のことを指して述べたものではないところに注意が必要だろう。

既往の分析と安政地割復原図の関係　「安政屋敷帳」による地籍復原は、史料・絵図類と地籍データ、そしてテラス分布調査の重ね合わせを可能にしてくれる。

安政の地割は、九郎左衛門町及び小右衛門町で概ねテラス分布調査の成果と合致することが確認された。したがって、テラス分布調査の成果は、安政年間（1854 ～ 59）までは遡ることができることになる。「安政屋敷帳」の記載によれば、多くの敷地が元禄検地時の敷地形態を保つか、あるいは合筆ないし分筆されたものとなり、この形状が元禄年間（1688 ～ 1703）まで遡りうるものである可能性を示唆する。

また、安政地割復原の過程で、「上相川絵図」の内容と一致する部分が多いことも確認された。「上相川絵図」の信憑性の高さを示すものであるが、地割形状として見

ると、背割線が一直線に通るなど、実際の状況に比して簡略化して描かれているため、この図から各町の形成順序などを読み取るのは無理がある。

上相川の特徴は、上町・下町に比して、急勾配の斜面地に町が形成されている点にある。斜面を下るように道が通り、その両側に敷地を配する点は上町と共通するが、勾配が急なため、敷地間に大きな段差が発生し、全体としてテラス状をなす。このテラス状敷地がいかなるルールに基づいて形成されているのかを解明することが、上相川の形成を考える上での焦点といえる。

安政地割復原図からの都市構造分析

道路　上相川の道路は、大山祇神社から２本が平行して西に降り、さらにその両側に平行する道が通る。最も北側を通る道路には「本町」が形成されており、町名より、相川金銀山発見時に真っ先に町場化したところと考えられている。しかし、安政復原図ではむしろ副次的な道という印象がある。このことより、本町の町場化に続いて２本の主道が通された後、本町が衰退し、遅れて通した２本の道が主要な通りに転化したということを示すものであろう。

「上相川一筆絵図」では、本町周辺は多くが「荒地」となっているのに対し、九郎左衛門町及び田町の筋は水路が整備され、空き屋敷が畑に転用される経過が記されている。本町が早く衰退したのは、水利及び地質上の差異があったのかもしれない。

敷地奥行と背割線　宝暦２年（1752）作成の「上相川絵図」をみると、敷地背面の隣町境の線がきれいに通り、背割線が計画的に引かれているようにみえる。

しかし、安政復原図によれば、敷地奥行はある程度は揃うものの、かなりの凹凸がみられ、すべての町で計画的に背割線が引かれている訳ではないことが理解される。これは、一つには敷地背後に高低差があり、その地形に沿って奥行に凹凸が付いているため、もう一つには、町立てが一挙に計画的に進められたのではなく、町単位で個別に開発されていった様を示すものであろう。

安政復原図中では、九郎左衛門町については、特に南側の敷地が奥行 10 間ほどで揃う傾向がみられ、他の町に比して突出して計画性を感じさせている。恐らくは、平行する田町・鍛冶町の筋に対して、九郎左衛門町の筋の方が先に通されて町場化したことを示すものであろう。

田町は、町名より、上相川開発以前より住んでいた農家集落があった場所と推定されており、先行集落の存在故にわずかに開発が遅れたものと考えられる。

敷地奥行に関して、安政復原図と 18 世紀前半作成の「上相川一筆絵図」とで寸法の不一致が多々みられる。特に九郎左衛門町において、「上相川一筆絵図」の敷地奥行がかなり浅く記されている。安政復原図の寸法は元禄検地に遡ることができるため、「上相川一筆絵図」の寸法はその時点での平坦地実寸を記したものと推定される。すなわち、敷地としてはより深くまで達しているが、平坦に造成された面は浅く、裏手に傾斜地が残存していたことが窺える。

平成 17 年度及び 18 年度のテラス分布調査で確認されたテラス面は、安政復原図に近い奥行をもつものが多数みられた。したがって、「上相川一筆絵図」の時点から安政年間（1854 ～ 59）までの間に、裏手の傾斜地が平坦に造成されたものと考えられる。これは敷地が畑地化されたことを意味しており、現在のテラス面が、特に奥行に関しては畑地利用のために整えられたものである可能性を示唆する。

間口寸法と建物の向き　道に沿って均等に敷地が割られるが、上町、下町に比して間口が広めに設定されているようにもみえる。これをもって、敷地内には建物が道路に妻を向ける妻入で建てられたことを示すものと考えるのが一案であろう。ただ、この場合、敷地境に沿って、石垣下などに雨水排水のための溝を切る必要があると考えられるが、その痕跡は今のところ確認されてはいない。実際には、間口５ないし６間以上の敷地もみられるが、多くは２間半から４間半の間口であり、広い間口の敷地も合筆によるものと考えられ、元来は比較的狭い間口を標準としていたものと推定される。

18 世紀前半作成と考えられる「上相川一筆絵図」には、上相川の住宅が簡略に描かれている。その表現は、いずれの住宅も、道路に対して妻を向けてはおらず、平入で描かれている。絵画表現であるため、実景を反映せずに記号として記した可能性もあるが、この時点では住宅が平入で建てられていたことを示していよう。また、明治初年の絵図でも、上相川の住宅が平入で描かれているものがある。この状況を遡らせて、町立て当初より平入で建てられていたと考えることも可能であろう。

安政地割復原図分析を踏まえた上相川の形成過程　以上の分析を踏まえて、上相川の形成過程につき、推測の結果をまとめよう。

- 本町：間歩近接地に町立て→早期に荒れ地化。
- 弥左衛門町・九郎左衛門町の町立て：御根筋の道沿いに町立て。水路が完備される。
- 田町・鍛冶町：一段低く、上相川開発以前より田畑があったと推測。
- 裏町が町場化。

上町・下町の都市構造とその変遷

既往の上町・下町の形成過程分析

・『佐渡年代記』等の記述、各年代の町絵図、文政墨引図による地割の大まかな復原がなされている。
・各町の由来が詳しく記され、大まかな町立ての順序が明らかになっている。
・奉行所の設置：野田八千刈の水田→人見・むれいへ移転→奉行所の設置。
・一町目から四町目は、沼地だったものを、後に埋立てて町場化した。
・文政墨引図：職業分析がなされている。地割の大まかな復原も試みられている。
・京町から新五郎町の３階建。18 世紀に遡る現存町家が平屋であることとの差異。
・坂について。
・水金町の遊郭について。
・大火について。

安政屋敷帳による復原からわかること

上町の断崖部分（中京町を中心に）の所有　敷地背面線は計画的な背割線が通るようにみうけられる。しかし、敷地背面線と断崖との間に余地があり、地割と断崖の石垣形成とが対応していない状況が読み取れる。

下町の石扣町―紙屋町の裏の空き地　下町の都市構造は、一町目と羽田町の間で、南北に二分される。北側の各町、特に石扣町―紙屋町にかけては、浜側の町との境はほぼ余地がないが､南側の一町目から四町目の浜町は、浜側裏手に空き地が多い。しかしながら、下戸町では浜町まで含めて余地がない。

これは、古くから浜が利用された町では、裏手に余地がないということを示している。一町目から四町目までがむしろ特殊であり、これは沼地を埋め立てて町場化したことと関係しているものとみられる。

石垣と地割

相川では敷地裏手に石垣が築かれる例が多く、これが公共インフラとして築かれたものか、個々の土地所有者が築いたものかが、都市社会の理解の上で重要となる。下町では、羽田町以南と以北で様相が変わる。羽田町以南、すなわち一町目から四町目、下戸町では、敷地裏手の背割部には段差がなく、「安政屋敷帳」記載の奥行は背割線に届き、背面側敷地との間に空き地は生じていない。羽田町以北では背割部に段差があり、石垣が積まれている。敷地奥行はこの背割の石垣付近に空き地を残していることが多い。

一方、上町では、中京町以東の背面が崖となる敷地で、地割の奥行が裏手の石垣まで届いていない事例が多くみられる。下町の北半部と共通する様相といえる。

これらの様相から、石垣が個々の土地所有者に属さないものであることが推測される。すなわち、敷地裏手の石垣は公共インフラである可能性が高いとみられる。

上町の都市断面

大工町横断面２カ所、上京町横断面、縦断面、下京町横断面の計５カ所で実測をおこなった（図５―１９～２１）。

ここでは、上町における微地形と町立てにおけるその利用を視覚的に示すことを試みた。実測図をみると、各町における平坦面は、大工町では北側が、上京町では南側が明らかに広く、町を南北に二分する道路が、町立ての均等を必ずしも意識せずに通されていることが指摘できる。町割よりも道路の方が先行して存在していたことを示唆するものと思われる。尾根沿いに水路を通すことが、道路の位置を決定したと考えられないだろうか。

下京町北側の四十物町は、下京町に比して奥行が深い。下京町との間に高い石垣が積まれており、町境が明瞭である。地役人住居地区だった状況を反映して、石垣築造に際して下京町に対して広くとられたものかもしれない。

下町の都市断面

小六町、羽田町（長坂延長部）、三町目の計３カ所において横断面の実測をおこなった。

下町の北半部、羽田町から小六町、紙屋町にかけての町は、浜側背割位置に明瞭な段差がある。石扣町以北は特に段差が高く、小六町では 1.7mに及ぶ。この微地形は原地形に由来するものであり、町立て当初より存在したはずである。背後への敷地拡大が困難なほどの段差であり、宅地の大規模化がこの段差ゆえに妨げられたと考えることができそうである。小六町以北の町は、こうした微地形によっても性格付けられた面があるかもしれない。

下町の南半部、一町目から下戸町までは、裏町から浜町に至るまで、ごく緩やかに下がるものの、明瞭な段差はない。これは、埋立てによって町立てされたことと関係するものであろう。この特性ゆえ、背後の敷地を取り込んで大規模化する屋敷が多くみられ、町の発展をうながした面があるかもしれない。

旧来からの陸地と埋立地の境となるのが、羽田町と一町目の境、浜から江戸沢に通じる道である。本通りがこの道を境に南側と北側とで一筋分ずれるのは、こうした地盤の差異と対応している。したがって、この場所は相川の都市史・都市構造において極めて重要な意味をもつ。かつてこの道沿いに広恵蔵があり、近代には清心亭があったという歴史も、景観の歴史を価値付ける重要な記憶といえる。　（清水重敦）

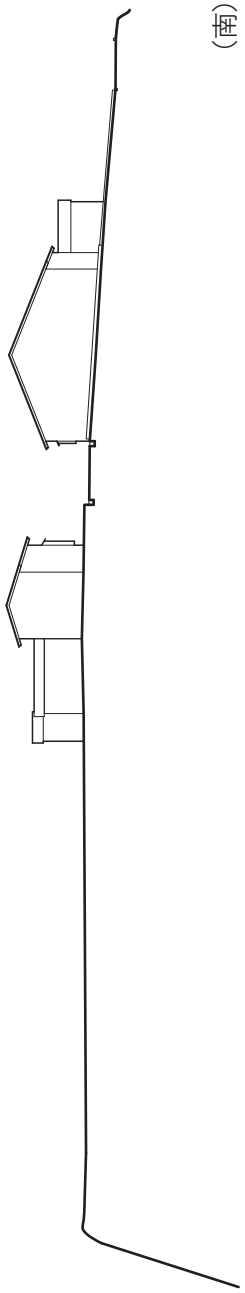


図５—１９　大工町南北断面図（１：５００）

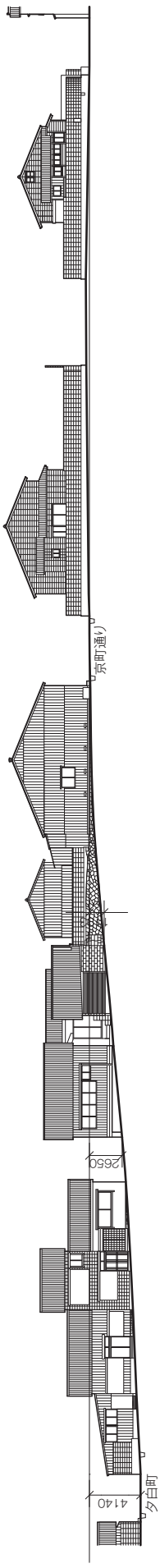
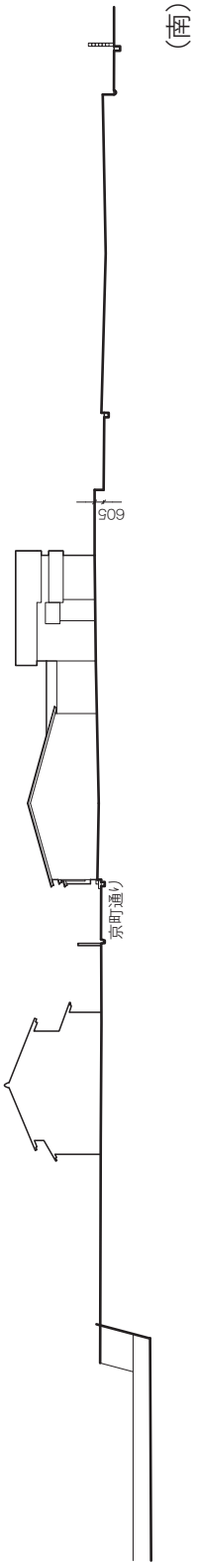


図５—２０　上京町南北断面図（１：５００）



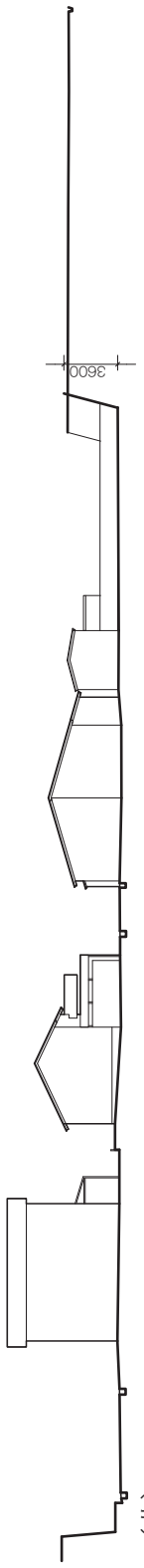


図５—２１　下京町南北断面図（１：５００）

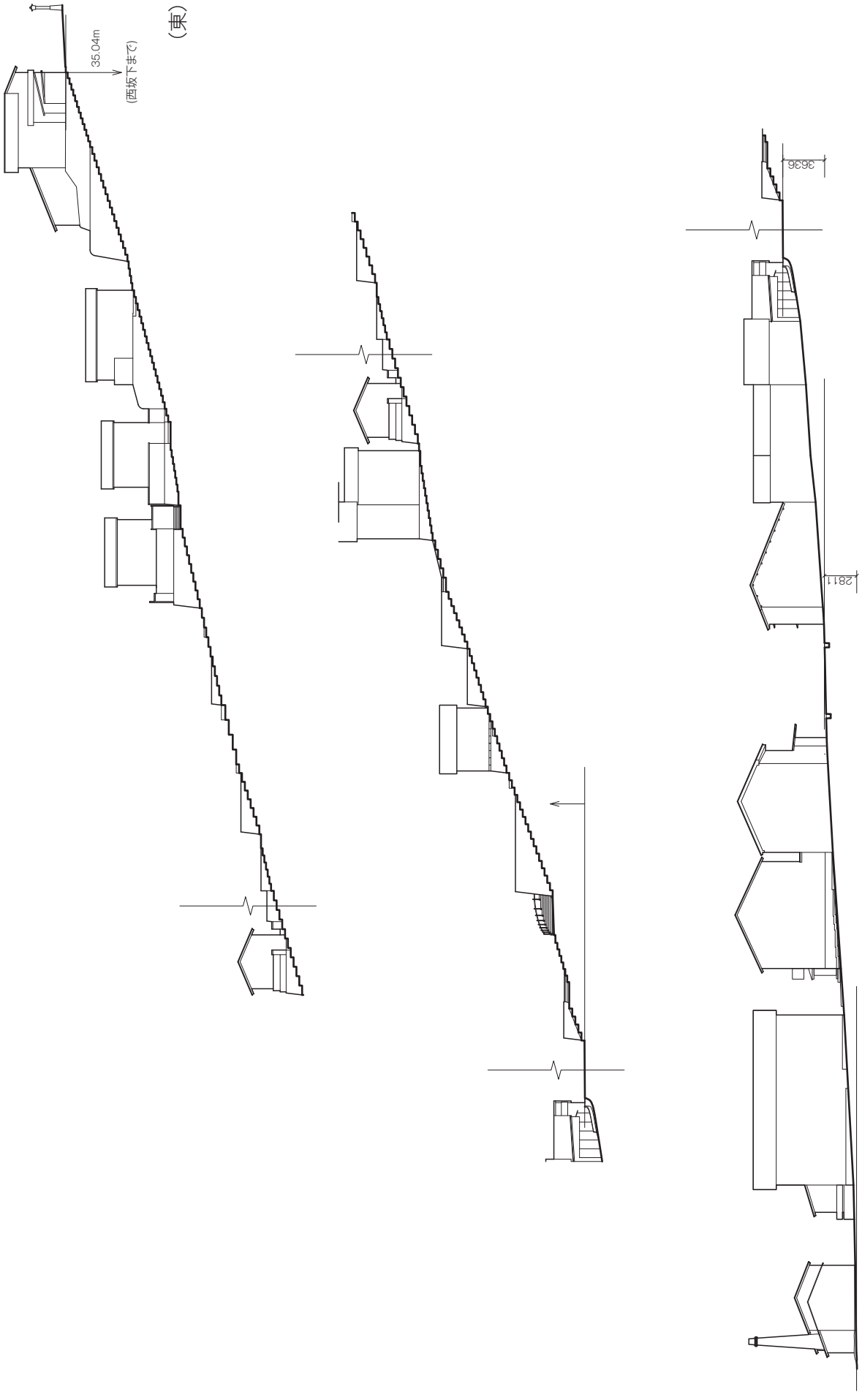


図５―２２　長坂東西断面図（１：５００）